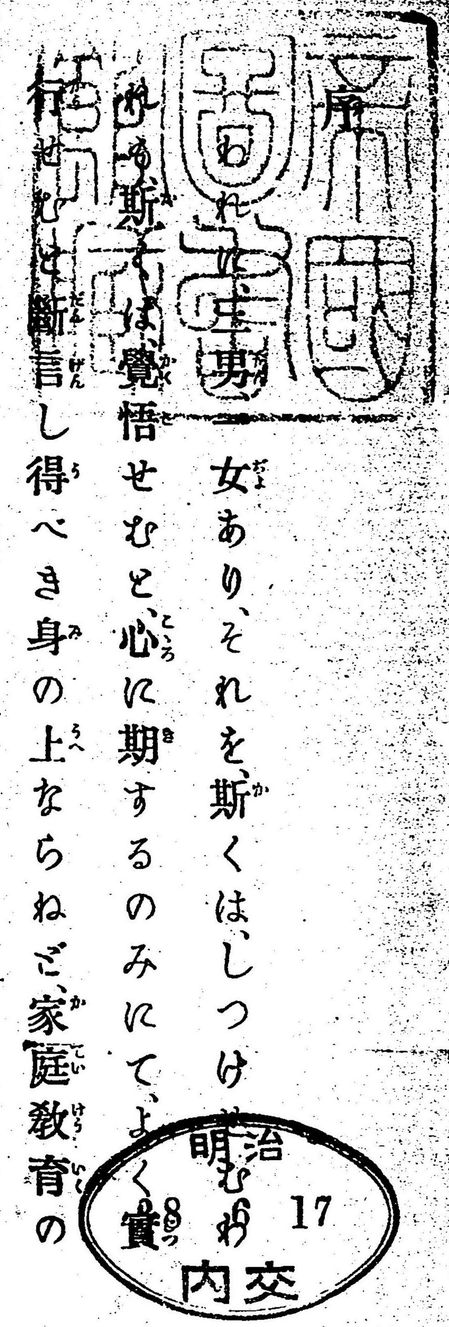
2-205
98
140

蘭

文學士
大町桂月著

東京
博文館
版權堂

序



女ありそれを斯くは、しつけ教育のみも斯くは覺悟せむと、心に期するのみにて、よく實行せむと斷言し得べき身の上ならねど、家庭教育の大切なることを、今更のやうに感じて、愚者の一得もやとて、この書謹んで世の青年の男女の前に呈し、あはせて、世の父兄の前にも呈す。

大町桂月

明治 6 17
内交 8 1 實

目次

	頁數
余の感謝	一
年若き人を戒む	三
昨是今非	九
新緑	一〇
女の子	一一
人生の三期	一二
戀愛の時代	一五
犧牲	二〇
極端と極端	二三
動と静	二四
そら見よ	二五

記憶力……一一六
實業家と品性……一一八
もとの嗅正直……一二一
眞正の膽力……一二四
返へらぬ綸言……一二九
同情……一二二
快樂とは何ぞや……一二四
欲しきもの……一二五
苦痛……一二五
庭園逍遙の感……一二六
雖實と機敏……一二七
二種の考……一二八

老少錄……一二九
貧者と富者……一三二
貧乏の德……一三四
客と主人……一三六
余の欽慕する人物……一三九
二人の妾……一四二
幸福なる人……一四四
某令嬢に與ふ……一四五
漢學の素養……一四五
讀書に就いて……一四六
作文の心得二十六則……一四七
女子と手紙……一四八

女子と高等教育……九八
傳記と女子……一〇〇
學生の娯樂……一〇一
青年の氣象……一〇五
青年の不平……一〇七
先輩……一一〇
男女の交際……一一二
失戀……一一六
妻帶の得失……一一八
愛の三變……一二〇
困つた女六種……一二四
妻の重荷……一二六

嫁と姑……一二八
妻と女子……一二九
女子と小人……一三一
女子と旅行……一三三
野宿……一三五
後悔錄……一三八
衞生上の美人……一四二
容貌談……一四四
女の戒十三則……一四八
女子雜感十則……一五四
女子と日本の家庭……一五九
女子の着物につきて……一六四

運動會……一六五
成功の要……一六七
大成の域……一七〇
職業と性質……一七三
職務の高下……一七八
年賀……一七九
衛生我觀……一八一
食物の戒……一八二
勝負事……一八三
學校騒動……一八五
座談と演説……一八六
競走の長短……一八九

目次

健氣なる雛僧……一九〇
奇人……一九四
實用の人……一九六
船に殉したる船長……一九八
決死の軍……二〇〇
國民の健康法……二〇三
海外の觀念……二〇五

終

家庭と學生

余の感謝

大町桂月著

われ筆ことりて、修養を説くこと、茲に五六年、謝劣余の如き者の言ふ所、さばかり益を爲したりとも覺えざるが、却つて余自身には、非常に益を爲せり。古來、道を説きし人は、皆修養既に足りたるものなるが、正直な處を云へば、余は人に教ふるに足るだけの修養あるものに非ず。多くの點に於て、むしろ常人以下也。かく修養足らざる身を以て、道を説くは、僭越也、生意氣千萬也との非難あるべきは、余の豫期する所也。されど、己れ未だ行ひ得ざるにもせよ、理想は理想なり。行を以て人を律するに足らざるも、理想を以て人を律せむとす。余が壯語を吐くは、青

年諸子の氣を壯にせむとするのみならず、自からの氣を壯にせむとする也。わが理想を說くは、青年諸子を導かむとするのみならず、自から導かむとする也。余は道を說かむが爲めに、わざ〳〵先哲の書を繙いて見たり、獨居や散步の際は、常にその事のみ考へ、人に對しても、己れを顧みても、いつもその事のみ考ふるを以て、啓發する所、頗る多し。たゞ酒の害を知るも、酒をのむことを廢する能はざるが如く、惡癖惡德と知るも、二三十年來の惰力にて、行の上には、未だ全く改むる能はざること少なからず。我田引水的かは知らねど、良心、既に之を咎む、良心痲痺せるにあらねば、余はひそかに、明日を賴む。又獨立せる成人と父兄の保護を仰ぐ青年とは、その行ふ所、異なる所あるべき筈也。小兒に飲酒を禁ずるが爲めに、自から小兒の前に飲酒を廢するやうな僞善的、姑息的なる德育法は、余の好まざる所也。小兒は小兒の行をなし、大人は大人の行をなすやうに敎へ込めば、それで十分也。余は、學生時代には、決して爲さゞりし事も、獨立しては、爲すこともあり。要するに、余の德行は、未だ人を律するに足らず、されど、道を說く爲めに向上しつゝあるは、事實也。これ余の感謝する所以也。

されど、かゝる事は、余のみにはあらず。古人も云へり、自から侮りて、人之を侮ると。自から侮りては、賢人も愚となるべく、自から信ずれば、愚者も賢となるべし。己れは、判任官の材也、とても高等官になれずと思へば、その人の力量は進まざれども、我れは大臣の材ありと自信すれば、それだけの仕事は出來るもの也。人は地位を作り、地位また人を作る。自信ありて、氣の壯なることは、男子が死ぬるまでも缺くべからざる事也。之を缺かば、老朽者となり果つべし。

年若き人を戒む

氣ばかりは若くして、いつまでも二十歲前後のつもりにて居るに、歲月は人を待たず、鏡にむかへば、既に頭に二毛あり、顧れば、身は早や四人の父となりぬ。志

せることは頗る多けれども、其十が一をも爲しとぐること能はずして、茲に明治三十六年を送らむとす。

余が半生は、失敗の歴史也。前車の履るは後車の戒とすべし。未だ覆らざる青年諸子を戒めむとて、わが失敗の歴史を語るも、亦無益の事にあらざらむ乎。

われ物心覺えてより、齋に就く程の病氣わづらひたることはなけれど、十數年以來、胃病に罹りて學業を妨げたること甚し。高等學校より大學へ移る三四年間、殊に甚しく、幾んど學を廢せむかとさへ思ひしばかりなりき。此間、爲めに一度落第したることもありき。今日に至るも、全治せず、爲めにわが精神上の活動、及び進歩を妨ぐること少なからず。かく胃病にかゝりたるは、種々の原因あるべけれども二十歳前後の盛なる血氣に乘じて、暴飲暴食を逞しうしたりしこと、其大なる原因也。當時、甘い物も好きなれば、酒も好きなりき。二十個の蒸菓子を肴に、五六合の酒のみたることもありき。今より思へば、無謀の事なり、當時にありても、醒めたる時は、馬鹿々々しく思へど、醉に乘じては愚にも付かぬことをなしゝことあり。

一例をあぐれば、或年の正月、年賀にまはりて、既に醉ひ、最後に一貴族の家に至りけるに、賀正の客多し。主人は酒を好む人にて、座に七合入、五合入、三合入の三組の盃を備へたり。愚かや、鴻門の會に、斗酒何ぞ辭せむとて、大飲したる樊噲か何かの氣になりて、侑めらるゝ儘に、七合入の盃を三口ばかりに呑み干し、それでよせばよきに、酒など如何ばかり飲みたればとて、醉ふものかと、下らぬことに氣張りて、そのあと、なほ三合入の盃を三盃ばかりも呑み干し、平氣な顏して居たりしも、一時に飲みたる一升五合以上の酒いかでか默つて居るべき。歸るさに、門の柱にぶつつかりて昏倒して、前後も知らざることありたりき。このやうな馬鹿な事なしたりし酬は覿面、われは胃病の身となれり。今日は、かゝる馬鹿げたる眞似する青年はあらざるべけれども、飲食の爲めに身體を害し、更に進んで身を誤るもの少なからざるべし。有爲の青年幸に余の覆轍を蹈むと莫かれ。かの三組の盃も

ちたりし貴族の人は、大飲、因となりて、去年、早世したりける。

余は、意志弱く、情もろく、理性明かならずに生長し來れり。愚なる哉、克己といふことは、一つもなく、半生を放縦懶惰にすごしける。暫時精力を集中することは、人に讓らざれど、長持ちがせず、一晝夜つゞけて徒歩したり、書を讀んだりするは、さまで苦しきことに非ず、平生は學課を勉強せずして、試驗前になれば數日間幾んど徹夜して俄勉強を始め、かくて漸く試驗の關門を通り越したるも、爲めに身體を害したること大なり。且つ俄に一時につめ込みたるものなれば、たゞ一時試驗の間に合ふだけの事にして、長く我身の物とはならず。之を旅行に譬ふれば、わが平生の修業は、五六里、走り續けに走り、大につかれて一日滯留したりなどして一時は、はかどるやうなれど、滯留の時日多くして、結句、そろ〳〵とたゆまず歩くものに如かず。又われは學事に好き嫌ひありて、心には大事なる學課なりと思ふも、好かぬものならば、どうしても手をつくる氣にならず。好いたものにのみ就きて愈せつぱつまらずば、之にとりかゝらざりき。之をまた旅行に譬ふれば、本道を歩かむとはせず、つい路傍の花に心ひかれて、うか〳〵逕路にふみ込み、氣のむいた方へと、ぶらつきて、益本道に遠ざかるが如し。かくては、學業完全なるべくもあらざる也。

殊に愚かや、才力なき癖に、二十四五歳の頃までは自負心餘りに強くして、頑冥不靈なりき。古今の聖賢英雄を、鼻のさきにてあしらひ、如何なる大家の名文に接するも、何んのこれ位の事がとけなしてしまひ、自分ばかりがえらいつもりなりしこそ噴飯の次第なりけれ。十三四歳より十七八歳頃までは、こつ〳〵と字義を詮索して書をよみけるが、「拘々泥々死二章句一、大丈夫兒所レ不レ爲」など云ふ詩の意味を誤解し、三國志、水滸傳など讀みて、張飛や武松のやうな眞似がして見たくなり、こつ〳〵と字引と首引するを愚と思ひ、實力を養はむとはせずして、氣節を砥礪せむとのみ心掛けて、粗豪自から甘んじたりしは、今より思へば、冷汗の出づるばかり

也。自惚は、無くてはならぬものなれど、一方にては、先哲を敬し、他の長を知りてよろづおとなしく、己を空しうして、師事する所なかるべからず。この用意なくば何事も大成せざる也。

此外、余は他に依頼する心を有したることもありき。下らぬことが癖にさはりて、人を愛憎褒貶したることもありき。小名譽心に驅られて下らぬ眞似したることもありき。不規律きはまる生活をつゞけたりき。勤儉の何たるを解せずして、下らぬことに、死金を濫費したることもありき。責任を重んぜざることもありき。違約したることも度々なりき。嗚呼恥多き余の過去也、暗黑なる余の過去なり。過去の追懷は、唯余をして身の毛よだゝしむ。されど、われ今、而立の歳と、不惑の歳との中間にあり。今にして悟るも、なほ遲しとはせざる也。

今われ青年諸子の前に、過去の懺悔をなすは、徒に一身の愚痴をこぼすに非ず、同じ覆轍に陷らひとする人を警醒せむとする也。

昨是今非

昨日の是は、今日の非、年は、いくつ取りても、過去を顧れば、恥かしきことの多き哉。十年以來、余の覺悟する所、二たび變せり。はじめ、余は士は己れを知る者の爲めに死すといふ語に、非常なる同感を寄せ人をなつかしがり、己れを知つて貰ひたく、己れを知る人をうれしう思ひ、己れを知らぬ人をいやに思ひ、氣合を知り合つた友がほしく、萬事、人にすかれたく思へり。

だん〳〵經驗をつむにつれて、眞に己れを知る人は一人もなきことを知れり。眞に氣合のあつた友は一人もなきことを知れり。宛も砂漠の中を一人ゆく心地して、世上の寂寞たるに堪へず。世の中がいやになりて、知己を求むる心もなくなり、名を求む思ふやうになれり。夢の如き一生也。死後に事業を殘したりとて、下らぬ事なりと

既にして、余は、また飜つて思へり。人生は活動の謂に外ならず。よしや、劣れりとも、われには我れだけの天賦あり。天賦を發揮して、死ぬるまで、有らむ限りの力をつくすこそ、世に生れたる意味を解するものなれ。人、われを知らざらば、知らざれ。われを誤解せば、誤解せよ、われを褒めなば、褒めよ。我を罵らば、罵れ。我を迫害せば、迫害せよ。われは我が是とする所に從ひ、わが天賦を飽くまでも發揮せむ。現世後世一人の知己なきも可也。己れを助くる友なくとも可也。必ずしも人をなつかしがらず、又必ずしも人にそむかず。強ひて孤立せず、強ひて人に容れらるゝを求めず。これ余の覺悟の二變にして、即ち今の覺悟也。

新綠

八重櫻ちり殘りて、躑躅咲く頃、樹に新葉をつけ、麥や雜草や既にのびて、滿目の草木、天地を綠了す。四季を人生に比することは、既に事ふりたれど、余は新綠の頃に際して、青年を聯想せずんばあらず。余は春の花よりも秋の紅葉よりも、初夏の新綠を愛す。春の花は、可憐なれども、よわ〳〵し。秋の紅葉は、はなやかなれども、生氣乏し。唯綠や、永遠の意を含む。希望の色もあれば、進取の相もあり爽にして快なる哉。

遠き希望を懷き、進取の氣に富むは、青年の特色也。人の一生中、青年時代ばかり爽快なるものなし。隙駒の過ぎゆくは如何ともしがたけれども、せめて、いつまでも青年の意氣は失はざらむ哉。

女の子

三人まで、男の子ある上に、今一人生れたり。その子、女也。瓜の蔓に、茄子は生らず、父は、ひよつとこの出來損ひ、母は酉の町の賣れ殘り、汝も美人には緣遠かるべし。學資だけは十分に出す考なるも、家貧なれば、美衣はまとへぬものと覺

悟すべし。在來の家庭教育の如く、女としての特別の教育は加へざるべし。實物として育てざるべし。唯人として教育せむとす。長じて、嫁したくば嫁せよ。材能を以て獨立せむと思はゞ、處女に終れよ。父は汝の天性嗜好を矯めざるべき也。

人生の三期

人生のわかちに色々あれど、色慾の有無によりてわかつも、亦面白かるべし。色慾のなき時代、即ち第一期也。色慾のある時代、即ち第二期也。色慾のなくなりたる時代、即ち第三期也。

各期とも、その特色を有す。第一期の色慾なき時代は、食慾最も盛也。從つて身体は一年二年に生長す。今年あへる着物は。來年は必ずつんつるてんになるべし。少し精神上にたち入れば、記憶つよし、眞似することを好む。可憐にして、無邪氣なれど、また極めて氣隨氣まゝ也。即ち我の念最も強し。極端なる個人主義の實行せらるゝは、即ちこの時代也。殊に甘き兩親の下にありては、本能主義が思ふ存分に發揮せらるゝ也。その代りに、第二期に入りて、苦しかるべし。

第二期に至りて、色慾生ず。色慾生ずれば、食慾はさまで甚しからず、身体の生長も少くなり、終に停止す。記憶力減ず。その代りに想像力、思考力、強くなる。色慾既に盛也。「世の中に戀しきものは、父母の外にあらじと思ひしものを」の情、男女ともに起るべし。從つて同情此際に盛になるべし。この際は、家庭より社會に通ずる無形の橋の上に立つ。もはや本能主義、極端なる個人主義を逞しうするに由なき也。我と社會との衝突生じ、これが心中の煩悶の最も甚しきものとなる。即ち親にあゝえて、だゞを揑ることを得ざる也。慣るれば、或は悟れば、この煩悶はうすらぐべし。うすらがざるものは、ニイチエの出來損ひとなるべし。第一期にありて、本能的性慾の中にて、食慾が活動の基となる也。慾が活動の基となれるが如く、第二期にありては、色

第三期、即ち色慾なくなりたる時代は、人は幾んど枯木冷灰也。色慾なくなると共に、活氣なくなりて愛想なくなりて堅意地になり、冷酷になり、利他の情うすらぎて、利己の念つよくなり、また第一期の氣儘氣隨に復せむとす。男は社會にもまれたるものなれば、わけのわかり居るもの多けれども、女は鬼婆となりて嫁をいぢめるもの多し。

之を要するに、人の人たる所以は、第二期、即ち色慾ある時代にあり。色慾のなき時代と、色慾のなくなりたる時代とは、餘りに利己にすぎて、社會的動物の域に遠ざかれり。色慾は、動物の本体也。色慾あるが故に、同情起り、愛情起り、利他的動物となる也。色慾なくんば、社會の機關は、圓滑に運轉せざるべし。色慾は強きを尚ぶ。英雄色を好むとは、即ち是也。

こゝに、一種の厄介物あり。第一期の親にあまえたる味をいつまでも忘れず、第二期第三期を通じて氣隨氣儘に、本能的性慾を逞しうし、利己の念つよくして人を眼中に置かず。才を恃み、氣を負ひ、順境に處すれば、益増長して、我をふるひ、我が少しでも抂げらるれば、自から求めて煩悶する也。かゝる人の第二期の初こそ危けれ。第二期の初は、利己の域より利他の域に移るべき時也。即ち「まゝならぬこそ浮世なれ」と云ふことをさとりて、大に奮發して運命と戰はざるべからざる時也。然るに、親に甘えたるだゞつ子はこれを悟る能はず、戀に失望し、功名に失望し、社會に愛想つかし、人間がいやになり、思ひ切りよきものは、自から形骸的に死亡し、思ひ切りの惡きものは、精神的に死亡す。浮世のだゞつ子の末路憫れむべき哉。

戀愛の時代

色慾のなき時代、色慾のある時代、色慾のなくなりたる時代とは、大別したるものなるが、色慾ある時代を更にわかてば、戀の時代と色の時代とになるべし。

色慾なき時代の本能には、食慾を滿すことが唯一の慰藉也。色慾生じたる後は、色慾を滿すことが唯一の慰藉也。初めは極めて無邪氣也。たゞ戀故に戀を求む。即ち戀の時代也。既にして色々の慾起り、男女の間、もはや純潔ならず、浮世には、之を分別ありとてはむれど、實は神聖なる戀愛をはなれて、色慾の奴隷となりたる也

男は三十以上、女は二十五六以上、色氣の度減じて、慾氣ふかくなり、慾氣により て男女相むすび付き、戀愛のもぬけの殼が假りに浮世の夫婦となる也。

青年時代、之を本能的側面より云へば戀の時代也。もとより功名の念胸に燃えて その準備にいそがしかるべけれども、一方には、戀の焔、胸をこがす。而かも日本の社會は、青年者に對して、餘りに冷酷也。世のわからず屋は、輕卒にも誤解すら く、戀とは、臭骸相抱くこと也と。かくては、けんのんなりとて、男女七歳にして 席を同じうせしめられず、男も女も戀の味を知らずして、「しぶかろか知らねど柿の 初ちぎり」、親と親とが世話してくれて、見たこともなかりし男女一夜の中に、琵琶

湖と共になり出でたりと傳へらるゝ富士山の如く、忽ち夫婦といふもの出來て、三國一の聟樣嫁樣とうたはれ、氣のあはぬものにても、不承して夫とし妻とせねばならぬ也。

吾人は、本能主義を排斥す。然れども、抑ふべき所は抑へ、伸ばすべき所は伸ばさゞるべからず。菓子をほしがる小兒に、飯ばかりくはせるは、餘りに冷酷なり。戀に渴する青年をして、男女全く交際するを得ざらしむるは、餘りに思ひやりなき也。青年の時代、先生の前には、嚴格ならざるを得ず、朋友に對しては、氣張らざるを得ず。出でゝも、入りても、氣のつまり通しにて、終に女子の前に、慰藉を得るに由なし。食慾時代は、女の前にあるも、何等の感じもなし。三十以上、色の時代に入れば、またさまでの感じもなし。たゞ青年時代は、女の前にあれば、一種醴酒に醉へる如き感情を生ず。視線と視線と相出遇はむとしては、忽ち相避くる初心の域を通り越して、口よりも眼がよく物言ふやうになり、男は女に接したく、女は男

に接したし。これ動物自然の性情也、物のおはれは、これより知るべく、優美の情もこれより生ずべし。社會の先輩、粋をきかして、適宜にこの性情を滿足せしめざるべからず。即ち男女交際の道を開くべし。

男女交際を、直ちに野合と同一視すべからず。男女交際とは、男女相互に智識を交換すると共に、一種男女間に起る感情の醴酒に醉ひて、精神を慰藉し、興奮するの謂也。それにつけても、女の方の知識と見識とを高むるを要す。在來の習慣上、女は男にかなはぬものと思へり。また女は男に柔順ならざるべからざる者と思へり故によろづ卑屈になり、男に媚を呈するやうになれり。これ習慣の罪なれども、女も亦罪なしとせず。今の處、とても女は男と對等の交際は出來ざるべし。女も今少し知識をひろくして、男に媚態を呈するの風を改めざるべからず。今の處自から卑下して男に媚ぶる女はあり、時に男ののろきにつけわがりて我儘にふるまふあれど、れ女もあり。されど、男をして尊敬の念を起さしむる女は、幾んど之を見ず。藝妓や、娼妓や、媚態を呈し居りて、何等の知識も見識もなく、生きたる花に異らざればこそ、男も之を弄びたき氣にもなるなれ。女子も馬鹿にはならぬほどの知識ありて、容貌も氣高く、心も氣高からば、男子之に接して、自から尊敬の念を生ずべし決して妄りに野卑の情を起すものに非ず。女子こゝにいたりて、はじめて、男女交際の道は開かるべき也。人は元來變化を愛す。花ひかに美なるも、變化なし。女のよく言ひよく動きて、變化きはまりなきに如かず。美人の像や寫眞は花の如し。ひかに美なるも、その變化なきがうらみ也。よしや器量は二の町なりとも、氣の利きたる顏付は、人をして氣持よからしむ。目うごき、唇うごき、体のこなしよく、氤氳たる口氣、人に逼りたらむには、絶世の美人の寫眞を見るよりも、遙にまされり殊に心のけだかき女子多からば、之に接する男子は、自から野卑の情うせて、心高尚になり、啻に慰藉を得るのみならず、自から品性を高むる也。但し、一利一害は物にまぬかれざる處、はじめの程は多少の犧牲あるべきことを覺悟せざるべからず。

青年の花柳界に墮落するを防がむには、男女交際を自由にするを、第一の徑路となす。無理に之を抑へつけ、賢を賢として、色にかへしめむとするは、これ渇する者に飯を與ふる也。

犧牲

何事も、成功者の先頭もしくは裡面には、犧牲者あり。犧牲者の中には、その名その功、世にあらはるゝもあり、彰はれざるもあり。源氏の勃興に於ける成功者は頼朝にして、犧牲者は、頼政也。秦の天下を亡ぼせる成功者は、漢の高祖にして、犧牲者は、陳勝吳廣也。維新の功臣として成功せるものは、西郷、木戸、大久保等にして、犧牲者は、山縣、藤井、竹内の三士をはじめとし、隙ゐて吉田松陰、橋本左内、武市半平太など、一々數ふるに遑あらず。遽く之を例すれば、日露戰爭の旅順攻撃に於ける海の閉塞隊、陸の決死隊の如きは、みな犧牲者也。これらは、その

名のあらはれたるものなるが、世には、名も功もあらはれざる犧牲者、頗る多し。「一將功成萬骨枯」、一將の功成るの裡面には萬骨の犧牲ある也。何人も成功者にはなりたく、犧牲者にはなりたくなきが、普通の人情也。されど。犧牲なくんば、成功もなし。之を客觀的に見るも、吾人は成功者よりも、むしろ犧牲者を謳歌す。主觀的に見るも、吾人は、なまじつかの成功よりも、むしろ犧牲を快とす。必ずしもその名と功とのあらはるゝと否とを問はざる也。

之を維新の際に見るに、賊名を帶びし者は順逆をあやまりたれど、幕府には忠にして、進んで犧牲者となりし也。勤王の名を博して成功せし諸藩、頗る多けれど、其實多くは曖昧也。長州の如きは、一時、俗論黨の勢を得たる時もありしかど、比較的によく勤王に終始せしもの也。薩州之に次ぐ。その他の諸藩は、鳥羽戰爭後、はじめて、心を勤王に一決せしもの也。よしや、表面に勤王の名を博し、功を博したるも、良心に對して、豈にやましからざらむや。筒井順慶を學びて、成敗を觀望

しつ〳〵、誠忠の士をむざ〳〵殺し〳〵こと幾何ぞや。名と功とは、浮世の假のもの也あると見れば、有り、無しと見れば、無し。男子たゞ我良心に對して、快しと思ふ事をなせば、能事畢れり。その爲めに死すれば、むしろ幸福也。吾人は、いさぎよき犧牲たるを快とす。なまじつかの成功たるを快とせざる也。

極端と極端

『動は千丈の瀑の如く、靜は山中の湖の如し』、これ余が押川春浪に書して與へし所也。余は山中の湖を愛す。青山、四面を圍み、人家なく、人籟なく、碧水澄みて、うごかず。實に靜の極にして、我が心をして、水と共に澄ましむ。この趣は、森林中の小池にても得べし。余はまた瀑を愛す。一落千丈また萬丈、銀川九天より下るの觀を呈して、その響、乾坤を震蕩す。實に動の極にして、余は終日之に對するもあかず。趣は、異なれども、我が心を澄ましむることは、山中の湖と同一なり。一方に靜の極を愛し、一方に動の極を愛するは、大に矛盾するがごとくなれども、物の極端と極端とは、相接するもの也。大に野暮なるものは、大に粋なるものと同じき所あり、大に愚なるものは、大に賢なるものと同じき所あり。なまら半弱のもの、その間に彷徨す。余は、おとなしき人を愛す。兼ねて洒落なる人を愛す。色にありては、赤、白、黑、みなよし。所謂間色は、われ之を好まず。食物にしても、辛、甘、苦、酸、みなよし。中間の味を好まず。柳の枝のなよ〳〵たるも、よけれど、梅の枝の頑張るも、亦好し。雨しめやかなる夜、燈の下、ひとり靜に氣に入りたる書をよむもよければ、風雨の海上、天吳を叱咤するも、亦よし。唯、余は、之を好むも、自からは、北域に近づくことだに出來ざるのみ。眞の英雄は、よく此の域には、これ英雄の本體也。鉅鹿城を拔きし項羽は、鬼也、垓下に虞姫と別れし項羽は兒女なり。怒つて明の封冊を裂きし秀吉も、その妻妾にはのろき手紙を送れり。似

而非豪傑は、この域に達すること能はず、或は威張り、或は氣取る。世俗或は欺かるゝものあるべけれど、識者與みせず。

動と靜

仁者山を樂み、智者水を樂むと云ひけむ、靜者靜を愛し、動者動を愛するが、常なれど、極靜者時に極動を愛し、極動者時に極靜を愛す。植木いじりは、普通、活氣なき老人の爲すことなれど、覇氣滿腔のものも、時に之を爲すことあり。これ極靜によりて覇氣を慰籍せむとする也。鬼を挫ぎさうな豪傑が、可憐なる少女を愛するも、之に同じ。之に反して、極靜者激すれば、極動の擧を爲す。溫厚の光武皇帝が一躍して、天下を取りしも、これ也。南陽に閒居せし孔明が、起つて天下を三分せしも、これ也。おとなしき光秀が起つて本能寺を攻めしも、これ也。もしなほ動者の例を言はゞ、始皇の車に鐵槌をなげつけし張良が、山に入りて、赤松子に從ひしも、これ也。覇氣ありし石川丈山が東山に隱棲せしも、これ也。極端と極端とは相接す。天下の風雲を叱咤する者は、極動者か、若しくば、極靜者也。尋常の動者靜者とは、與からず。

そら見よ

『いくさの門出に、くれ〳〵もお諫め申したその時に思ひとまつてたまはらば、斯うした嘆きはあるまいものを』とは、院本の太功記に於ける光秀の妻が其夫を諫むる言葉の中の文句也。ひとり光秀の妻のみならず、世の俗人は、常にかゝる愚痴の言をくりかへす。人、我言を用ゐずして、失策ありたる時は、必ずや曰く、そら見よと。口には發せざるものも、心には斯く思ふもの多かるべし。畢竟するに、小人の根性也。君子の襟度に非ず。

人は概して己れの功をほこりたきもの也。己れの言行はれて成功せし場合には、

得々として鼻をうごめかして、吹聽せずんば氣がすまざる也。行はれずして成功せざる場合は、之に不平加はりて、そら見よと言はずんば氣がすまざる也。そら見よと言へば、自分の氣は濟むなれど、他に對しては、感情を害するに過ぎず、愚痴の言にして、やゝ毒氣あるもの也。

用ゐられずして怨みず、功ありて誇らず、これ紳士の品性上、重んずべきと也。衆に先んじて日露戰爭を唱へ、いよゝ其意見通りて、戰爭はじまる。自から吹聽せずとも、その功勞と苦心とは、知る人ぞ知る。得意になりて、わざゝ之を吹聽するが如きは、われその人の品性の爲めに取らず。

記憶力

記憶力のありすぐるものは、獨創力を缺くことあるべく、また想像力を缺くことあるべし。然れども、如何なる職業に從事するにしても、人並以上の記憶力なかるべからず。

學校にある間は、理解力を養はざるべからず、また獨創力を啓發せざるべからざれども、試驗の關門を過ぐるに、記憶力が最も必要也。人によりて、記憶力の多少あり。記憶力の乏しきものは、學校にある間は、大に損也。

記憶力は、年齡の多少にありて、增減す。少年の時は、記憶力つよけれども、年老ゆるに從ひて減少するが常也。これ生理上の關係もあるべし。又事業の繁簡は、大に記憶に關係す。少年の時は、色々氣をくばる必要なく、日永きと年の如くなれども、年長じて、關係多くなるに從ひ、あちらにも、こちらにも、氣を配ばらざるを得ざるやうになり、心おちつかずして、記憶の印象うすくなるものなり。又暴飲暴食して、胃を惡くし、從つて腦を惡くし、從つて記憶力を減ずることあるべし。

余の過去に見るに、余は、漸く人並だけの記憶力ありしが、暴飲暴食の結果なるべし、二十三歲の頃より記憶力人並より遙に下れり。爲めに學校にて試驗をうくる

上にも、自から學を修むる上にも、文をつくる上にも、損害をうくると甚し。少年の士、願くは前車の覆へるにかんがみよ。

實業家と品性

政治家は、人を對手とするものにて、實業家は、金を相手とするもの也。既に人を相手とす。智なかるべからざるは、言ふまでもなけれど、智のみにては不可也。德なくんば、えらき政治家になれず。判斷力だにたしかなれば、自からは智能なくとも、下に智能あるものを用ゐて、それで、事業は擧ることにて、智者能者を操縱するの力が、何よりも、政治家に必要也。如何に智能あるも、根性いやしければ、人、之に服せざる也。實業家は、やゝ之と趣を異にす。實業家とても、多くの人を使ふとなれば、人を服する力あるを要すれども、利をだに分てば、人は甘んじて、其下に働くべし。慾深く、利にさとく、理性と意志とが發達して、情なく、從つて情實に抱泥せずして、たゞ利これ圖るやうな人が、實業家として成功するが如し。政治家には、品性が第一の要件なるも、實業家には、却つて品性の下等なる方がよさやう也。換言すれば、武士根性が政治家に必要にして、町人根性が實業家に必要なるやう也。然らば則ち、實業家は品性あるを要せざる乎。余は斷言す、決して然らず、實業家とても、品性なかるべからず。

高利貸や、不正の商業をなすものならば、いさ知らず、苟くも社會の表面に立ちて、立派なる實業をなすものは、品性なかるべからざる也、實業家は、利を得るが商賣なれば、徹頭徹尾、利の觀念を離るべからず。されど、たゞ私利のみをはかりて、毫も公益を顧みず、公德を顧みず、終に利の爲めに國を賣りても顧みずといふやうになりては、決して繁昌するものに非ず。また人は利に集れども、利に服するものに非ず。一時服するも、機を見て離れむとす。徒に情にもろきは、實業家の禁物なるのみならず、浮世のあらゆる事業に禁物也。されど、實業家とても、変る人

あり、華客あり、使ふ人あり。同情すべきことには、同情せざるべからず。殘忍刻薄人を人と見ずして、たゞ器械と見るやうにては、第一に使はる〜人服せず、交る人もそむき、華客もはなれて、間接に、直接に、其事業が妨害せらるべし。

これが、維新以前の社會にありて見れば、社會の水平線上に立つものは、武士のみにして、農工商は、よそにせられて、所謂町人根性にて實業家はたちゆきしなるべし。されど、封建制度すたれて見れば、社會の上層に立つものは、金あるもの也。華族も貧くしては、紳士の體面がたもたれず。商人も金あれば、華族と同じく社會の上層に立つを得べし。金が紳士の資格になりて、上下たゞ利を追ひ、華族も學者も、高官の士も、町人根性を有する者が跋扈するやうになり、實業家は金あるが故に、一躍して、社會の上層に立つに至れり。かくて、品性、地を拂つて空しさやうになれり。然れども、これ過渡時代の假りの現象也。今後の紳士たるものは、むかしの武士のやうに、利をよそにするを得ざれども、紳士らしき品性なかるべからず。武士すたれて武士道もなくなりたれども、紳士起りて、紳士道起るべきは、未來の社會必ず之を證すべし。過渡の時代、武士道は、しばし其かげを隱したるも數百年來の武士道一朝にして全滅するものに非ず。必ず變形して紳士道となりて世にあらはれむ。豺狼のフロックコート着たるものが、實業家として成功したりしは、過去の一夢也。今や、社會の秩序整頓しかけたり。豺狼のフロックコート着たるものにては、實業家として、大に成功すること能はず。衣食足つて、禮節を知るとかや。依然たる町人根性にては、二十世紀の實業家たるを得べからず余は信ず、今の實業家の急務は、品性を修養するにあり。

もとの嗅正直

もと娶りし妻、これと云ふ長所もなけれども、甚しき缺點もなし。顏も美なるにはあらねど、醜なるにもあらず。されど、今少し賢なる女、美なる女をとて追ひ出せ

り。次に娶りし妻、智慧ありて、働にはぬかりなし。されど、勝氣にして横着也言ひ爭ひ絶えず。終に自から見限りて、出でゆけり。次に娶りし妻、容貌は此上もなし。されど、くず也。なまけ者也、寢坊也、おつくりがすきで、仕事が嫌ひ也。腰重く、尻長くしておしやべりがすき也。見よげなるは、たゝその顏ばかりにて、座敷も、臺所も、簞笥の中も、常にとりちらして、狼藉たり。亭主には、常にぼろびた衣服を着せ、よごれたものは、押入に堆くして、洗濯せうともせず。それでも顏にめんじて家に置きしに、よからぬ風聞ありければ、終に追ひ出せり。その後幾人となく、妻を娶りたれど、氣に入りしもの一人もなし。今となりて戀しきは、一番初の妻也。されど、如何せむ、今は人の妻なり。我よりは地位もよく、財產も遙に多き人の妻也。二三人の婢女にかしづかれて、身なりも我家にありし頃よりは遙によくなれり。もとよりは利口げ也、顏も綺麗になれり。戀しい哉。

女にも、またかゝる悔少なからざるべし。よしや、かくまでに實行せざるも、心中暗に不平にて、良人が氣にくはず、いやでくたまらず、年が年中、少しも心の安慰を得ざるもの少なからざるべし。

すべて、現在は、醜也。過去は、美也。未來は、益美也。さらでだに、人は慾に限りなきものなるに、女は殊に人を羨むもの也。少時の遊仲間が零落し居ればとてさまで氣の毒とも思はざれど、出世して居れば、羨ましくてたまらぬが常也。羨しさの餘りに、ねたましくまでもなるが常也。友の良人の地位高く、勢力あるにひきかへて、我良人の働なく意氣地なきが、くやしくてたまらぬとあるべし。友の良人は、その妻によき衣をきせて芝居や花見につれゆくに引きかへて、我良人は我に衣服買つてくれる餘裕なく、家にのみくすぼらせて、下女の代理のみさするに、益腹立たしくてたまらぬとあるべし。かくて、斷然見限りて去る薄情女もあるべし。去るの勇氣なくして、居るには居れど、良人をみくびりて、笑顏一つ見せぬ人もあるべし。

人は、事業の點には、多慾なるがよけれど、心の安慰を得むには、足るを知らざるべからず。分を守らざるべからず。運に甘んぜざるべからず。餘りに慾ふかく、自惚つよくしては、何處にゆくも、安心は得られざるべし。佳人才女が、ろくでもなき男に身を任せたと思はゞ、くやしく思ふの情も起るべけれど、ろくでもなき男を憐んで夫にしてやりたりと思はゞ、それで可なるに非ずや、必ずしも、夫が主にして、婦が從なるに非ず。古來偉人の妻に愚婦あり、才子の妻に醜婦あり、それでも甘んじ居りし也。女も、そのやうな氣になれぬものにや。

眞正の膽力

如何にして膽力を養ひ得べきかとは、余がたび〳〵人に問はれたる所也。余や、元來、臆病者也。膽力を説くの資格なきもの也。されど、余は、必ずしも膽力に重きを置かず。以爲へらく、膽力なくとも、覺悟如何によりて、膽力あるものと、同じ言行をなすを得べき也。

その覺悟とても、さまで、むづかしきことに非ず。たゞ自信あること、廉耻心あること、熟練することの三要件あれば、先づ十分也。余の身に就いて言はむに、余は少時口どもりたるを以て、人中に出しやばりて、しやべることは、大に苦痛なりき。從つて、演説するには、大に臆病なりき。されど、人に強ひられて、止むに止まれぬ場合、今日まで三四十回ありて、少し慣れたり。もとより巧に演説せむとの自信は今日に至るも、未だ之を得ざれど、たゞ一片の廉耻心あり。普通の人が之を爲し得るに、われ如何に口訥なりとは云へ、之を爲すと出來ずしては、男子たるもの〵耻辱なり、天分の致す所、巧には出來ずとも、人並に出來ざる筈なしとて、思ひ切つて、演説し始めたるが、その拙なることは、自から期せし所也。かくて度かさなるにつれて、依然として巧みにはならざるも、最早臆することは無くなれり。聽衆が多ければ、多きほど、わかつた人が多ければ、多きほど、益氣が張りて、張合があ

るやうに思ふに至れり。もし余にして、辯舌巧にして、かねて名論卓説を有せしならば、はじめより好んで演説を試みしなるべし、余は之なきを以て、はじめは、大に臆したり、即ち、余は、演説に於ける臆病者なりき。その臆病者が、今は演説することを何とも思はざるに至れるは、一は、廉耻心也、一は、熟練也。又自信とても、余は到底之を辯舌の上には、有するを得ざれど、その説く所の上には、時に之を得ることあり、辯は拙なるも、説く所は、さまで、まづからずと思へば、氣が張るもの也。名案なく、また腹稿もなき時は、今でも、なほ少し氣臆れするを免れず。

この理は萬事に通ずべし、舟を漕ぐにしても、よく腕をきたひあげたりとの自信あれば、浪荒るゝ大海に出でゝも、氣臆れせず、もし不動明王に祈る迷信あれば、膽ますく〳〵すわるべし。それも、はじめて、大海に出づれば、少し氣臆れするかもわからざれど、幾十回も、そのやうな目に逢つて見れば、習慣の致す所、最早恐るしくは思はざるべし、その上にも、荒浪を恐れては、男子の耻辱なりとの廉耻心、胸にみつれば、その爲めに、氣、張りて、恐怖の度減ずべし、減ぜずとも、卑怯なるふるまひはせずして、膽のすわりたる人と同じやうなる事をなすを得べし、社會に活動するも、戰場に出づるも、かゝる覺悟あれば、膽力自から生ずべき也。

かゝる覺悟ある人ならば、先づ膽力ある人と云ひて可也。されば、膽力を養はむには、第一に、自信あるを要す。次に、熟練するを要す。これだけにて可なるも、自信十分ならざる場合には、廉耻心を以て、之を補ふべし。何事をなすにも、膽力が必要なるが、これだけの覺悟あれば、まづ、まづつくことなし。されど事不意に起れば、智者、智を失ひ、勇者、勇を施すに由なきことあり。こは、何故ぞといふに油斷して、心にゆるみあれば也。思ひがけず大犬に吠えかゝられれば、一寸驚くことあるべけれど、犬が吠えかゝるかも知れぬと用心して居れば、何とも思はざるべし。よしや、不意に出でゝ、一時は驚くも、手に棒など持ち居りて、何の犬がくひかゝつたら、撲ぐるまでの事と思へば、恐しくも、何とも無し。これ即ち自信也。

世に、盲目蛇におぢずといふ事あり。これも、一種の膽力なれど、實は純正なる膽力に非ず、神經のにぶき人、理性のくらき人、情の乏しき人、強慾なる人などは、よそ目に大膽不敵と見ゆることを爲すものなるが、これ畢竟、危險を知らざるが故に、恐れざるまでの事也。この類の膽力も、時により、場合によりては、必要なることもあれど、智生ずれば、やがて消えうすべき膽力也。自信より生じたる膽力の正確なるに如かず。

理性明かにして、神經の敏なる人は、恐るゝ事多し、その恐るゝは、眞に恐るべき事也。恐るべきを恐るゝは膽力なきに非ず。恐るべきを恐れざるは、馬鹿也、膽力に非ず。さは云へ、普通の人の恐るゝ所、必ずしも眞に恐るべきものにあらざること多し。そは、理性以て之を判じ、氣以て之に當り、自信以て之を貫くべし。此の如きを、眞の膽力と云ふ。盲目蛇を恐れざるは、僞の膽力也。僞の膽力つよくして、親の小言を恐れず、學校の制裁を恐れず、法律を恐れず、名譽のなくなるを恐れざるが如き者は教化し難くして、世に害毒を流すこと多し。余輩の取らざる所也。理性は明かなれ、神經は敏なれ、而して自信つよかれ、然らば則ち眞に恐るべきを恐れて、恐るゝに足らざるを恐れず。天を畏るゝの外、良心に對して、毫も畏るゝ所なくして、社會に濶歩するを得べき也。

返らぬ繰言

返らぬ繰言、幾度くりかへしたりとて、とりかへしのつかぬものなり。愚痴をこぼすことはやめよとは、よく人の言ふことなれど、これその一を知りて、未だその二を知らざる也。死んだ子の年を數へたればとて、その子が生きかへつて來るものにあらざれど、かなしさの餘り、口へ出して、思ふ存分言つてしまへば、それで却つて氣がはれるものぞかし。たとへば、陰雲かさなり合へる五月雨の空の、降つて〳〵降りぬきたる後ならでは、さつぱりとはれざるが如し。心にくよくよ思ふこと

を、こらへて言はずに居れば、陰雲ますく〳〵重り合ふのみにて、はる〳〵時なし。愚痴をこぼして、たまれる涙を流してしまへば、雨ふりつくして、空快く晴る〳〵が如く、心却つて慰めらるゝ也。これを察せずして、あの人は悲しみ居れば、氣を引きたて〳〵やらむとて、面白さうに罪なき話しかくる人あれど、これは慰めにはならずして却つて苦痛を與ふる者也。愉快に樂しめる人に、かなしき話もち出せば、その人の興を破るとひとしく、悲しめる人に、樂しき話をもち出すも、亦興さむるわざ也。子でもうしなひたる人ある場合に、その人に向ひ、思ひ切つてあきらめよ、かなしみたればとて、取りかへしがつかずとて、いさめ勵まさむとするは、これ冷かなる理を以て、人に推すなり、それくらゐの事は、本人とても百も承知、千も承知承知して居りても、思ふに任せざるが、人の感情なり、心に似ぬは涙なりけりと詠じけむ、感情が冷かなる理にて律せらるべきものに非ず。その御悲みは御尤なり。われもむかしてんな悲しき目にあへり。あんな苦しき思をなせりと、合槌うちて、共泣になくを見て、譯のわからぬ人かな、あんな悲しいこと言ひ出して、更に涙を添へしめけるよなど、冷に嘲る人もあれど、その方が、却つて悲しめる人の心をなぐさむるわざ也。すべて人はつれを求む、笑ひたき時は、共に笑つてくれる人あるを喜び、陰氣にて泣きさうな人をよろこばず。悲しき時には、人の共に泣いてくれるがうれし、快濶にして笑ふ人は、癪にさはる也。

泣きたればとて、それが何にもなるわけにはあらねど、泣かずには、居られず。これ理性以外の問題也。愚痴をこぼして何の益になるかとは、お門違ひの反問也、益無益以外、愚痴をこぼしたきが故にこぼす也。感情を以て、之を解釋すべし、理性を以て解釋すべきに非ず。

女は男に比すれば、なほ更感情に富める者なれば、愚痴をこぼすことも甚し。されど、愚痴もしくは不平をこぼすにも、多少事柄と場合とを考へざるべからず。累を人に及ぼすことは深くつゝしむべき也。姑に對する不平を、心に忍ぶ能はずして

下女に向つてもらしたり、更に下りて出入の商人にもらしたりするは、思慮の足らぬわざ也。すべて、かげにて、人の噂せざるやうに心掛けよ、とんでもなき禍をまねくことあればなり。よしや甲が乙に對する惡口を聞きたればとて、言はでもすむ事なら言はずにすますべし。うかと言ひつけぐちして、迷惑な目にあふこと多し。口かずは多きを妨げず、その言ふ所罪なくして、趣味あるべし。みだりに人を品評し、褒貶し、人の秘密をもらすべからず。古人も言ひけむ、口は禍の門也。

同情

男は知と意とがまさりて、まるで情のなき人少なからざれども、女は幾んど情のみにて、かたまり居候。かく情のみにてかたまり居らば、從つて同情があるかと申すに、さうは參らず候。

女は情に富むものゝ、情が激しては、隨分不人情なともいたし候。女は弱く、且つ臆病なるものに候へども、丑の時參りと申して、夜の二時頃、獨りで寂しいお宮のある處へ參り、恨める人をのろひ殺すわざをいたし、例少からざりし由、物の本に傳へ申候。瞋恚のほむら、胸にきざしては、同情もあつたものに非ず、男より、もそつと殘酷なることをいたし候。同情の反對なる嫉妬心は、男よりも、女の方が強く候。下女などに對して、無慈悲きはまる奥樣も多く候。あによめをいぢむる鬼千疋も多く候。嫁をいぢむる姑も多く候。姑をいぢむる嫁も多く候。女が女をはむることは滅多になく候。本妻がめかけを敵視するは、言はずもがな。女同士よりあへば、靄々たる和氣は決して無之候。

同情多かるべき筈の女子にして、かく同情の反對の結果あるは、何故ぞと申すに元來、情は盲目にて、知が加はらずば、往々方向をあやまり申候。知が勝ちすぎては、冷になり候へども、知の加はらぬ盲目の情は、同情にもなれど、またとんでもなき無慈悲なることをしでかし申候。女はまた度量せまく候へば、思ひつめては

同情をも何處かへ追ひやつてしまひ申候。女はまた私情のよくして、一身もしくは一家のみを氣にいたし候故、金の二三圓も人にめぐむのを、國家が亡ぶるやうに思ひ候へば、同情を表出するに由なく候。先づざつと、このやうなものに候。

同情は人の美德に候。殊に婦人の美德に候。而して婦人をして、この美德を全うせしめむには、私情を抑へ、度量をひろくし、知をみがくの外なく候。

快樂とは何ぞや

大久保武藏鐙といふ書物の中に、或人、大久保彦左衞門に向つて、世に最も快しと思ふは、如何なる事ぞと問ひけるに、途上、大便を催して堪へ難き時、たまたま野雪隱を見出して、之に入りて大便するばかり快きは無しと答へけりとあり。自にするも穢なき事柄なれど、眞理、自から其中にこもれり。

六日間、一心になりて勤勞したるものにして、はじめて、日曜の休課の樂しきを知るべし、六日間、のらくらと過したるものは、その樂しきことを知る能はざる也。夏の日、汗を流して山路をのぼりたる者にして、はじめて、峠の茶屋の清水の快味を知るべし。涼しき高樓に起臥するものは、その快味を知る能はざる也。

世にこれが快樂ぞとさして言ふべき對象なし。たゞ苦の味を解する人にして、はじめて樂の味を解すべき也。

魚を得むと欲する者は、水に赴くべし。獸を得むと欲する者は、山に入るべし。樂を得むと欲する者は、先づ苦むべし。

欲しきもの

十歳前後の人曰く、菓子。二十歳前後の人曰く、美しき妻。三十歳以上の人曰く、金。

苦痛

十歳前後の人曰く、親の小言。二十歳前後の人曰く、試驗。三十歳以上の人曰く

生計。

庭園逍遙の感

余が借りて住へる家の庭園、太だひろし。梅、櫻、楓、杉、松、などしげりあひて、その幾千万株なるを知らず。はじめの程は、たゞ何となくめづらしく思ひて、閑ある毎に、往いて逍遙しけるが、二月三月たつほどに、さまで珍しうは思ざるやうになれり、畫にせよ、文章にせよ、藝能をなぐさみにものする間は、何となく面白けれども、いよ〳〵その藝能を職業となし、それに糊口するやうになりては、樂しと思ふよりは、むしろ苦しと思ふと多かるべし。されど、うゑたる茄子胡瓜が今日は幾寸のびたるが、實をつけたるかとては見にゆき、小兒が蟬やさいかちを取れといふまゝに、そをとらんとて、樹々の梢を仰ぎながら歩みでは、逍遙また茲に趣味を感ず。かゝることをめあてにしたればとて、これといふことは無けれど、めあてなくして歩くよりはまされり。生前の事業、死後の名も、考へて見れば、此といふことは無けれど、人の思ひ〳〵に望む所のものを好むとて、浮世に活動するうちに、一生は面白く送らるべし。

確實と機敏

才氣あるものは、機敏なれども、確實なりがたく、剛毅なる人は、確實なれども機敏なりがたし。確實と機敏とを兼ぬる處、これ軍人として最も必要なるのみならず。普通世に事業をなす人としても、亦必要なる事也。

確實とは、正直に、規則正しくして、勞を惜まず、危をさけず、己の任務をはたすことをのみ心掛けて、毫もごまかすことなきを云ふ也。これには、意志の強きを要す。大抵の人は、眞面目になりて、勤勉しさへすれば、出來ざることはなかるべし出來ざるは、修養訓練の足らざる也、もしくは小才あるにまかせて、すうすうしく

なりたる也。

機敏ならむには、才氣を要するとなれば、天性にぶきものは、機敏なる能はざれど、然し慣れと注意の如何とによりては、ひと通りの域には到るを得べし。

いづれかと云へば、確實の方が、學びて得やすけれども、機敏とても、學びて得ざるには非ず。ぼんやりして、學ぶに意なきものは、終に度すべらかざる也、

二種の考へ

身躰の健康上、身躰の活動を要するが如く、頭腦の健康上にも、また頭腦の活動を要す。もし何も考へずに居るを以て、頭腦の保養になると思ふは、迂の極也。

何も老へずに、ぼかんとして居り勝ちの人あり。これ愚なる人也。知慧發達すべくもあらず。考へるにしても、過去の事を追懷する者あり。これ老人に多し。若き人にても、理性にぶくして、比較的感情に富める人に多し。常に未來の事を考ふる者あり。これ老人には稀なるとにして、理性發達し、進取の氣象さかんなる人に見る所也。

過去のうれしかりしとを追懷するも樂しく、くるしかりしことを追懷するも亦樂しきものなれど、追懷したればとて、進境にて役立たず。語を寄す、進歩せむと思ふものは、漫に回想にふけること莫れ。

歩くにしても後方を見ては歩かれず、人は常に未來を考ふべし。眞砂路を歩かむに前方に目標あれば、足跡直也。人は常に一定の希望を懷くべき也。

老少錄

花開き、花落つる一春の間、われは外祖母をうしなひ、又嬰兒をうしなへり。祖母は、年八十八、嬰兒は、生れて四五十日經たる女の子也。知らず、八十八歳いきのびたるもの幸福にして、四五十日生きたるもの不幸なる乎。八十八歳いきたるも

四五十日ひきたるも、死すれば同じ黄土の下、かたみの墓石頑として、その生を語らず。老少不定は、世の常也。八十八歳にして死したりと聞くも、四五十日にして死したりと聞くも、人は、尋常の事とすべけれども、幾んど同時に兩者を失ひたる身にとりては、對比上、一種の感なくんばあらず。

人生短しとは、古來、人のかこつ所なれども、夫には、五十年前に死別れ、五十六歳の長子には、三年前に死別れ、三十一歳の長孫には、十八年前に死別れ、曾孫その數を知らず、二人の玄孫までもありて、あらゆる浮世の酸いも甘いも嘗めつくしては、餘り長すぎる夢なるべし。くやみに來る人も、二言目は、めでたき往生なりとて、涙こぼすものもなし。兼好法師も云ひけむ、人は惜まるゝ時に死ぬべきにや。

人は長く生きすぎては、境墓に達する前に、嬰兒に復歸す。極老の人も、嬰兒も同じく、慾とては、たゞ食慾あるのみ。同じく歩行する能はず。同じく襁褓につゝまる。口言はず、眼見ず、腦考へず。飲食の外には幾んど浮世の味をうくること能はず、たゞ躰のみは異にして、一は小に、一は大に、一は萠え出でたる蕨の如く、一は枯木の如し。

極老の人も、嬰兒も異なる所なしとすれば、祖母は八十八歳の赤子にして、娘は齢四五十日の老女といふも不可なかるべし。老女が赤子に復歸するまでの經歴は、忘れては、有るもなほ無きが如き也。

おゞや、人間の常情、孤兒が亡き親を慕ひ、親ある子を羨むも、親の養育を待つ間の事也。子を持つて親の恩を知るも、子の愛は、親の愛よりも切なるべし。

老いて死ぬるは、人生の自然也。世にさばかりの痕跡をも留めず。何よりも第一に子を愛するは、動物界の自然の情也。子を失ひたる親、殊に母の悲は子を失ひたる者之を知るべし。子の死は、永遠に痕跡を存す。冷かなる世は、あざけりて曰く「死にし子の齢を算ふ」と。又あざけり曰く、「死にし子は、みめ好し」と。

加賀の千代女、夫を失ひて咏ずらく「起きて見つ、ねて見つ、蚊帳のひろさ哉」、

と、子をうしなひて嘆ずらく「とんぼとり今日はどこまでいつたやら」と。とんぼとりの殊に哀切なるを感ず。知らず、親を失ひし時にも、かゝる好句ありしや、否や。

貧者と富者

世に感心なるは、貧にして、義理ばる人也。金ありて義理ばるとは、誰でも出來る事也。否、はさためと金とは、きたなからざれば、溜まらずとて、却つて義理を缺いて顧みざるもの多し。貧なるも、金あるときは、義理ばり易けれども、憤鼻褌までも質において義理ばらむとする心をくめば、涙なきを得ず。然るに世人は、たゞ金錢品の多少をうけて、その志をうけず。心なきわざ哉。

また感心なるは、富貴にして品行よき人也。それも境遇上、品行よからざるを得ざる人ならば、あたり前のはなしなり。貧にして品行よきも、及第點を得るまでの事也。金はありあまりながら、主義を有し、理想を有し、他に高尚なる快樂を有し活動力をその方にむけて、野卑なる獸慾を抑ふるに至つては、今の世、先づ感心すべきこと也。

富み榮えて、不品行なる人の中にて、感心すべきは、藝者の弗箱となる人也。常に美衣を給して、到る處の酒場を飾らしむ。仁なる哉。

今の華族に、三種あり。大名華族、公家華族、匹夫よりなり上りたるもの是也。匹夫よりなり上りたるは自分の功勞にて爵を得たるものなれば、その初代はまんざらの無能者に非ず。大名華族、公家華族は世襲なれば、その身に價値なきもの多し公家華族は、貧乏世帶ふり廻して來りたるもの多ければ、從つて、さまでの馬鹿も少なし。大名華族には、所謂馬鹿殿樣おほし。徒手遊食の無用の閑民多し。士佐の舊主、山内侯爵、年なほ若く、身體さはめて虛弱なるも、なほ陸軍士官となりて、熱心にその職につくせり。折々知識見聞を開くとて、海陸軍、帝國大學の出身者を集めて談話會を催すことありとぞ。殊勝なる哉。一般の華族の模範たるに足るべし。

貧者常に勞し、富者常に逸す。されど、幸福は勞逸以外にあり。貧者多く勞働の快樂を感じ、富者多く逸居の苦痛を感ず。

貧にして樂天家あらば、眞の樂天家也。富にして厭世家あらば、眞の厭世家也。順境に處し、もしくは富みて、樂天なるもの、逆境に處し、もしくは貧しくして厭世なるもの、豈に眞に人生を知らむや。

貧乏の德

最も苦しきは、若い時、樂な境遇にありて、老いて、逆境に貧乏するものなるべし、生れてより死ぬるまで、樂な境遇をつゞくるものは、樂なやうなれど、樂になれては、樂も樂にあらざるべし。それよりも、生れてより貧乏の境遇をつゞくるものが、却つて仕合也。

苦と云ひ、樂といふも、心の持ち方ひとつ也。貧なら貧で、貧の苦あり。富ならば、富で、富の苦あり。富にも樂あれば、貧にも亦樂あり。はじめ富みて、後に貧なるは、美肴になれたる人が、急に粗食するやうにて、非常に苦しきもの也。貧しき人は、富める人を見て、うらやめども、衣食の心配こそなけれ、富むにつれて色々慾も起り、心配も起りて、よそ目程には、樂しからぬもの也。否、衣食が少し樂になりたる爲めに、氣ゆるみ、氣ゆるむにつれて體よわり、元氣が沮喪して、よろづ發達せず。且つ、金がたまれば、根性がいやしくなり、義理を缺き、人情を缺くこと多し、一生貧乏なるは苦しけれど、少時より慣れて、贅澤の味を覺えざれば、富人が想像するほどには、苦しからぬもの也。富人がシャンパンにて得る快味を、同じく貧民は、濁酒にて得べし、且つこれではならぬ、これではならぬと、心常にはげむを以て、身體もよわらず、病氣にかゝること幾んど之なし。心には、常に希望ありて苦しきが中にも、浮世が面白く送らるゝ也。

少時の貧と老時の貧と、貧は同じけれど、之を感ずるには、非常の差あり。少時

の貧は、希望あるを以て、苦しからざれど、老いては、希望なくなるを以て、苦しく感ず。男の子あれども、教育する能はず、娘あれども、衣服をこしらへてやること能はず、我身は、かくて自から甘んずるも、何も知らぬ妻子が、かはいさうなりと思へば、腸ちぎるゝ思あるべし。貧人は貧中にも老後の覺悟せざるべからず、少時より勤儉を解すれば、貧乏ながらも、老後の苦みはなくなるべき也。

一生貧にして、老後、富めば、その樂は非常に大なれども、必ずしも、富まずともよし。浮世は、いやと思ひて去るこそよけれ、樂と思はゞ、執着が殘りて、安心立命を妨ぐることあるべし。

客と主人

名士には、訪問者多し、知りもせぬ人までも、續々訪ひ來る。家にて、研究をなし、仕事をなす人には、迷惑なる事也。本職の仕事を妨げられては、迷惑なりとて留守をつかふ人あり。事情、止むを得ざることなれども、留守をつかふはよからぬ事也。忙しければ玄關番に用事をきかせても可也。數分間、面會して、明らかに、仕事ある由を言ひて、直に去らしむるも可なるべし。

訪問する人も、心得べきこと多し。食事の時刻に訪問して長坐すべからず。食事の時ならずとも、妄りに長坐すべからず、長く話したければ、先方の用事如何を聞きて、閑ならば、長く談話するも可なるべし。下らぬ世間話を長くして、聞きあきる頃、はじめて用談をもちだすは、邦人のならはしなるが、これも忙しき今の時世に適せざること也。早く用事を話してしまひてその後、雜話するとも、せぬとも、相互の都合如何に因ること〳〵すべし。

あらかじめ、手紙を出して、先方の都合を聞きあはするは可也。されど、何時何日、訪問するから、待つて〻與れよとて、手紙を出すは、先方に迷惑をかくること多かるべし。四五日のちの事なれば、如何なる用事起るかも知れず。また用事をく

りあはせても、其日になりて、急用起るかも知れず。一概に我便宜をはかりて、先方をして我を待たしめむとするは、待たしめらるゝ人は、迷惑此上もなし。かゝることは、親しき仲にても、一考すべきこと也。まして、ほんの面識のみの人をや。又まして、一面識もなき人をや。

訪問する時刻にゆかずして、三十分おくるゝことあり。一時間おくるゝことあり、二三時間をくるゝことあり、甚しきは、訪問せずして、先方に待ちぼうけをくらはすることあり。此の如きは、社會上の禮を失するも、亦甚しといふべし。また單に午前とか、午後とかと、ぼんやりした時刻を言ひやる人もあれど、これも甚だ先方の自由を妨ぐるわざ也。午前と云ひても、時間ながきことなり、用たしに行かねばならぬ事あるも、約束の客ある筈なるが爲めに、半日間むなしく束縛せらるゝことあり。常識を缺きたるしわざといふべし。

余の欽慕する人物

余が家の床の間に一軸あり。一老人、薪に腰かけて書を讀む樣を描けり、これ即ち薪を賣りつゝも、なほ書を讀みし老窮書生朱買臣の圖也。

買臣は、前漢の武帝の時の人也。武帝は、文に、武に卓越せる英主也。從つて學者文才あるもの多く擧用せられ、武將のすぐれたるものも多く世にあらはれたり。所謂野に遺賢なしとは、この時の事也。然るに、買臣は四十餘歲にいたるまでも、野に窮居せり。家貧也。山に入りては薪を伐り、市にいでゝ之を賣り、以て漸く糊口せり。かく買臣が四十餘年の生涯は、市井の一貧人、下等社會に沈淪せるもの也されど、世間一般の勞働者と異なるものあり。即ち書を讀むことを好むこと也。あゝ、彼の現實は、一樵夫に過ぎざれども、たゞ書を讀むによりて、彼は無窮なる理想の天地を有す。家にありても、書を讀み、薪を行商する際にも書を讀めり。彼

に妻あり、夫と勞苦を共にし、夫と同じく薪を負ひつゝ行商せしが、もとより尋常一般の婦人、讀書の樂を知らず、夫の賢を知らず、たゞ望む所は人なみに樂な生活をしたきこと也。買臣の妻となり居りては、いつまでたちても、浮ぶ瀬なしとみきりをつけて去らむことを求む。買臣もし普通の人ならば、薄情なる女と怒りもすべけれども、さすがに賢人也。彼は、その去らむとするを怒らずして、彼が貧故に妻を勞苦させて、その勞苦に酬ゆる能はざることを氣の毒に思へり。しとやかに慰めて曰く、われ年五十にならば、富貴になるべし。汝の苦むも、今しばらくの間也。汝、我にそひてより貧苦にのみ沈めり。われは我が貧窮よりも、その事のみを苦にす。請ふ、わが富貴とならむ日を待て、その時に、汝が勞苦に酬いむと云へば、妻怒りて罵りて曰く、君の如き意氣地なしは、終には、のたれ死をするばかり也。五十にて富貴になるとは、あひた口がふさがらぬたはけごと、そんな事をあてにして待つて居られるものかと。かばかり買臣を馬鹿にしたれど、買臣なほ怒らず、終に止むを得ず、その妻の言ふがまゝに去らしめたり。

のち數年、官の人夫となり、荷車をひきて、都にのぼれり。わが手腕をあらはすは、こゝなりとて上書してその志を言ひけるが、英主の武帝その文を喜びたる上にも、嚴助とて、買臣と同郷にして、用ゐられて帝の信任あるものも、買臣を推薦しければ、さらばとて、拜謁を仰せらる、身分を言へば、樵夫が人夫となれるものにて、卑賤此上もなし。かゝるものを宮中に召見し給ふこと、才を愛する非凡の英主ならでは出來ざると也。されど、身分こそ賤しけれ、四十年來、萬卷の書を讀みつくしたる賢人也。武帝一見、之を喜び、直に擧用して、嚴助と同じく侍中たらしめ、しばらくして會稽の太守たらしめ給へり。その會稽の太守たらしめ給ひしも、故あること也。會稽は、買臣の故郷也。數年前までも樵夫たりし人を、武帝の烱眼その賢を知りて、其地第一等の大官として遣はしけるも、世に一興あるわざ也。富貴にして故郷にかへらざるは、錦を着て夜ゆくが如しとの事なるが、今汝如何と言

ひ給ひたるは、さすがに酸いも甘いもかみわけ給へる言葉也。

かく、買臣は妻に語りし如く、五十にして果して富貴となれり。然るに、其舊妻は、いづくまでも、不運なる人也。買臣を見限りて去りたる後、更に他の人に嫁しけるが、その人も貧賤也。太守となりたる買臣が、威儀堂々として吳の界に入りたる時は、舊妻は新夫と共に、土方となりて、路普請に從事しつゝありし時なり。買臣一見して、その舊妻なるを知りて、其夫と共に後車にのらせて、太守の官舍に入り、夫妻を別に邸内にすまはせて、あつくもてなせり。嗚呼、何ぞ其心事の高潔なるや。舊妻は、我を見限り、口ぎたなく我をのゝしりて、他の男に嫁したるもの也普通の人情ならば、面當てにと、むかしの恨をはらすわざをすべきに、買臣の心は人よりも、神に近し。所謂怨に酬ゆるに、德を以てするもの、富貴にならば汝の勞苦に酬いむと言ひし通りに、舊妻のみならず、その新夫までも厚遇せり。かゝる心事は、俗人の解し得ざる所、眞の聖賢にあらずば出來ざるわざ也。太公望の妻も、其夫の貧にあひそつかして、自から求めて去りしが、その夫、一躍して、文王の宰相となるに及び、ずうずうしくも來りて、再びその妻となむことを乞ひける時、盆の水を地にあけさせ、その水を盆に入れよ、もとの如く夫婦とならむと言ひけるは俗人の域を脱せざる也。政治家としての技倆は、太公望の方が、買臣よりはすぐれたりしかも知るべからざれども、その人格品性の高下は、買臣と日を同じうして語るべからず、その差を月鼈にたとへむも、こと古りたり。買臣の心事を神とすれば太公望のは人也。げに、買臣の心事は、この一事にて推すことを得べく、尊く、氣高く、欽慕するにあまりある也。

その妻も、耻を知りたる女と見えて、自から耻ぢて縊死せり。春秋の筆法にて言へば、或は買臣、其妻を殺したることにもなるべけれど、もとより神ならぬ身の、舊妻が自から耻ぢて縊死せむとは思ひもかけぬ事也。買臣は、たゞ舊妻が現在の貧をあはれみ、もとの長年の間の勞苦に酬いむとて、しばし邸内に厚遇し、やがて樂

に生活の出來る方法を案出せむと思へる也。その經死せしは、買臣の意外に出でし所、之を買臣の罪といふべきには非ず。

買臣今は詮方なく、新夫に錢をあたへて厚く葬らしめたり。太守となりたるも、つゆ驕ることなく、もといろ〳〵世話になりたる人をよびあつめ、それ〴〵むかしの恩をかへし、共に飲食して、富貴なる新太守と貧賤なる故知人とが、身分をわすれて、同じく歡をつくしたりしは、一種の美談にして、買臣の心中、さぞやせいせいしたりけむ。

買臣に就いて、先づ學ぶべきは、妻われを見くびりて去るを怒らずして、却つてその勞苦に酬い得ざるを氣の毒に思ひ、一旦富貴となりては、厚く之を遇し、所謂怨に酬ゆるに德を以てしたるの心事也。かゝる心事は、夫婦の間のみならず、社會に對しても、國家に對しても、朋友に對しても、いろ〳〵の形に應用せらるゝことにして、普通の俗人には出來かぬると也。次に買臣に學ぶべきは、四十餘歲貧窮の中に勞働するも、なほ孜々として學を修めしと也。その堅忍不拔の志は万人の龜鑑たるに足れり。まして今の世の苦學書生にとりては、此上もなき教訓也。世の俗物は、いざ知らず、多少世の義理といふことをわきまへたる人は、恩をかへし、もしくは借金をかへしたる時ばかり、すが〳〵しき心地のすることはなかるべし。買臣が恩をうけたる故人といへば、いづれも樵夫に類似する賤人なりしなるべし。富貴になりて、悉く恩をかへし、借金をかへし、太守の身を鼻にかくることなく、かゝる賤しき身分の故人と同じく飲會せしは、よそに聞きても、すが〳〵しき心地のすると也。買臣が心にうれしと思ひしは、その武帝に拔擢せられし時よりも、故人に恩をかへしたる時なりしなるべし。這般の心事は、澆季の世の俗物とは語るべからず。

わが欽慕する人物は、少なからざるが、買臣の如きも、その一人也。時に世の人なみに、恨みもし、怒りもすることある時、一たび買臣の心事におもひ到れば、慚汗常に背をうるほさずんばあらず。

二人の妾

昔者、楊子、宋にゆきて、やどりけるが、その旅店に、二人の妾あり。一人は美にして、一人は醜なり。さるに、その醜なる者を上とし、美なる者を下として待遇し居りければ、楊子その故を問ひけるに、宿の主人、答へけらく、美なる者は、自から美とす、われその美を知らざるなり。醜なる者は、自から醜とす、われ其醜を知らざるなりと云ひけりとかや。

これ韓非子といふ書物に出でたり。われ少しく脚註を加へむ。路上酒前、女をながめむには、醜なるよりは、美なるがよし。されど、妻たり、母たらむには、顔の美は、心の美に加かず。殊に、われは美女なり、賢女なりと云はぬばかりにふるまはれては、鼻持ちのなつたものに非ず。自から醜なり、ふつゝかなりと卑下して、殊勝にふるまへば、人豈に之を憐愛せざらむや。

幸福なる人

世には、大厦高樓に住まひ、美衣をまとひ、肉慾を逞しうして、幸福なりと思ふものもあれば、陋巷に窮居して、一身を研究に委ねるを以て、幸福なりと思ふものもあり。幸福とする所、人によりて、さまゝなれど、一般を律して、幸福なりとさすべきものなくんばあらず。

先づ身體の壯健なること、一の幸福也。胃を病みて、はじめて胃の存在を知ると云へり。平生、壯健なる人は、或は壯健の幸福なることを知らざるべけれど、試に病弱なる人の身を思ひ見よ、身體常に苦しくして、思ふやうに勉強も出來ず、仕事も出來ず、生活にも窮すべし。壯健の一半は、生れつきにもよれど、一半は覺悟如何に由る。先づ心にくつたくの無きやうに心掛くべし。これ養生の第一也。次に運動をよくして、食慾色慾などの體慾をつゝしむべし。色慾のことは、衞生家のやかまし

く言ふ所なれども、父兄が子弟に向ひ、もしくは先生が生徒に向ひて、誰も口にするとはゞかる者也。されど、身體の健否に、大なる關係を有す、學生にして神經衰弱にかゝるもの少なからず、これ多くは手淫の害にもとづくもの也。かさねてくりかへさむに、常に心にくつたくなきやうにし、運動をよくし、體慾をつゝしめば、人は壯健となるべし、壯健なる人は、病にかゝることはなかるべし。人往々曰く、勉強すれば、病身になると。大に非也。勉強もいやゝゝながらしては、心にくつたくあり。趣味を解して、すき好んですれば、少しばかり度をすごしても、體にさはるものに非ず。勉強家に病弱なる人少なからざれど、これ眞に勉強その物の罪にあらずして、とんでも無き勉強に基づくもの多かるべし。

勤勉の味を解するも、一の幸福也。懶惰は、不幸の母なり、否、罪惡の母なり。手早く言へば、勤勉ならざれば、中等社會以下の人は、衣食を得ざるべし。上等社會の人とても、智能をみがくを得ざるべし。一生馬鹿殿樣にても、生活には、窮せざれど、一生ぐずぐずらして暮しては、人生の樂しさを知る能はざるべし。熱病を病めるものが、何を食ひてもうまからざるが如く、懶惰者は、世に住むがうるさくなるべし。人生はよくもなく、惡くもなく、苦もなく、樂もなく、勤勞によりてはじめて人生の意義を見る。人生とは、勤勞の謂也。動かざる水は腐敗す。活動せざる人は、自滅するの外なし。勤勉も、多少は遺傳によれど、習慣が大事也。人は幼時より勤勉の習慣あるを要す。嗜好の如何、慾望の如何も、大に勤勉に關係す。水は低きに就く。人、嗜好あれば、自から勤勉也。鷦鷯の一枝に安んずるは、慾少なき也。大鵬が圖南の翼を皷するは、慾大なる也。慾にも種々あれど、慾盛なれば人は自から勤勉也。消極的には、恐怖心は、人をして勤勉ならしむ、落第しては大變なりと思へば、自から勉強するやうになるべし。懶惰生が試驗間ぎはの心持を常にもちたきもの也。のん氣過ぐる者は、懶惰に流れ易し。

智能あるは幸福にして、智能なきは不幸也。宇宙は生存競爭場也。優者存し、劣

者滅す。劣者には、氣の毒なれど、天は常に優者に與す。而して翼の大なる者は鳥類の優者也。身の長き者は昆蟲界の優者也、智能ある者は、人間界の優者也。智と能とは遺傳にもよれど、自から之を得むとせば、勉强するの外なし。

人が優者とならむには、智能の外に、勇氣を要す。如何に智能あるも、妄りに障害に屈し、妄りに誘惑に動かさるゝやうにては、智能もその用をなさゞるべし。もとに溯れば、智能を得ることも出來ざるべし。勇氣あれば、內は自から勵み、外はよくあらゆる敵を壓す。而して猛獸に克つは、勇の下也、人に克つは、勇の中也、己れに克つは、勇の上也。

余は、人類の幸福の條件として、壯健、勤勉、智能、勇氣の四者を數ふ、富、位名譽などを數へず。智能と勇氣とは、力の一語につゞめて言はるべし、壯健も勤勉も、之が因となり、果となるものなれば、力の一語にあはすべし。即ち世に力あるものは、幸福なる者也。

某令孃に與ふ

家內より承り候へば、御身は、此頃文壇に評判よき某に思召有之、小生に取りもつてくれよとの意をほのめかされ候由。さては、御身も某の才筆にゞざつたるにや。さるにても當世のハイカラ式に、直接談判と出掛け給はざりしは、殊勝なる事と存じ候。一時はいやな思なさるゝかも存せず候へども、小生に相談ありしは、つまりは、御身の仕合に候。西洋人の語に汝若し愛讀する書あらば、決して其作者に逢ふこと莫れと、戒めたる事有之候ふが、實に尤千万の事と存候。元來文筆は、よく人を動かすものにて、殊に文學を好む少女達は、なほ更動かされ、見ぬ戀にあこがれて、定めし、やさしき御方なるべし。幸福なる家庭が作らるべしなど思ふもの多けれど、それが大に考へ物也。眞言致し候へば、文學其物は、尊きものに候へども、文學者は、男子中の屑に候。古今東西、數多き文學者の中には、人物らしい

人も全く無しとは申さず。されど、今の世、軍人社會、政治社會、實業社會には、男らしい人も、人物らしい人も有之候へども、文學者は見渡した處、ろくな人は、ひとりも居り申さず。御前樣の思召のある某の如きも、筆の上こそは、立派なれ、實際は、下劣なる男に候。小生はよくその人となりをも、その品行をも承知いをし居り候ふが、人身攻擊するやうに聞えては面白からず候間、精しくは申さず、唯御前樣の爲めを思ひて、御斷念あるべしと一言だけ申上候。小生のやうな蟲も殺さぬお人好が、このやうなことを申すは、よく〳〵の事と御推察願上候。

元來、未だ其人を識らずして、文のみを見て、直に其人を戀慕するといふことはけいそつ極まることに候。小生の如き、二十年も文筆に從事するものにありては、文を見て、其人を判ずるといふことも出來候へども、失禮ながら、御前樣の年輩にありては、それは不可能の事と存じ候。むづかしさうなこと言へば、頭のよき人、知つたさうなこと言へば博學多識、やさしげなことを言へば、人情のあつい人、ふざけたこと言へば眞面目ならぬ人、えらさうなこと言へば、えらい人と思ふやうな淺薄なる鑑識を以つて、人を判ずるは、年少者の常に候。それを以て、讀書のみに用ゐ居れば、まちがつて居るにしろ、さまで害はなけれど、結婚問題に應用すれば、危險きはまることに候。以後、文によりて、その人にほれるといふことは、斷乎として、おやめになるやうに御忠告申上候。

文學が好き故、文學者の妻になつたら、さぞ面白からうとは、經驗のなき年少者の、よく想像する所に候へども、それも間違に候。二月や三月やは、その想像通りに面白きこともあるべけれど、起きても文學、寢ても文學にて、家庭が治まるものにあらず。夫も執筆、妻も執筆、小兒が泣いた、あなた見て下され、いや、お前見てやれといふやうになりては、家庭は、實に亂脈に候。同性相はじき、異性相引く作用は、電氣にのみあらはるゝものにあらず。夫婦の間にもあらはるゝことに候。

お前樣の事なれば、淸貧に安んずるは、わけも無きことに候ふべければ、その點

のみは、文學者の妻たるに適し候へども、御母上様事、一生貧乏所帶をふりまはされたることなれば、せめて、娘は、少しは、らくな處へやりたしと思はるゝなるべし小生固より世俗的に金を嫁せよとは申さず。されど生活問題は、何人も一考せざるべからざることに候。自分一身は、どうにも、あきらめが付き候へども、男の子が出來た、高等の教育を施す學資なし。女の子が出來た、貧乏で、もらひ手なしといふやうな境遇には、御身をあはせたくなきが故に候。

聖人君子では、文學者になれず、英雄豪傑でも文學者にはなれず、文學者といふものは、概して　神經質の小つぱつけな人に候。神經質故、小さなことにも氣がつき詩文が面白く出來候ふが、一方に磊落を解する程な文學者ならよけれど、十中八九は、神經質一方痴情一方にて、わけがわからず、從つて品性いやしく、まことに、箸にも、棒にもかゝらぬ人達に候。小生の妻なども、あゝ〳〵文學者の妻にはなるものでなしと、日常てばし居り候。般鑑、眼前にあり。小生の妻の不平をきゝて、御參考になさるべく候。

殊に文學者などいふものは、神經質の上に、空想がつよきものに候へば、婦人に對する目も肥え、慾望も大に候。自分は、男子中の屑のくせに、妻をめとらば陰麗華を得べしと、胸中常に理想の美人を描き居り候へば、ちよつとや、そこらの美人では滿足いたさず。當年の山内容堂公のやうに、女もとより缺かず、われ必ず醜美を問はず、洒落を以て要となすと、さばけたもの無之、所帶もちがよければ、よし、小兒の教育が出來ればよしと、分別あるものも無之、身分不相當に慾張り候故、その結果は、言はずと知れたる失戀、われは煩悶せりなどいふ、下らぬ愚痴をこぼして、それで詩と云はれ、身が立てらるゝとは、不思議な世の中に候。お菊様を醜女と申すではなけれど、文學者は、つまり、さかり猫を追ひまはす狂ひ猫のやうなものに候へば、この點も、御一考なさるべく候。

砂の中にも金あり、文學者の中にも、時には立派な人なしとは、限らず。それに

當つた人は、世に所謂拾ひものに候。小生は、たゞ一般の文學者の事情を申上げて御身のみならず、文學熱にうかさるゝ少女達を戒めたき考に候。もとより、御參考に申上ぐるまで也。たゞ、小生に好意ある限りは、某の妻にとの御思召は、堅くお止め申候。

漢學の素養

維新以前、學問と云へば、漢學なりしかば、ひと通り漢學に通ずることは、さまで困難ならざりしが、今や中學教育に於て學ぶ學課、非常に多くなりて、漢學の如きは、一週間一二時間の課程あるに過ぎざれば、今の學生の、漢學の力の大に下れること自然の數也。

今の專門の學を修むる上に、漢學は、直接に、さまでの關係なきが如し。然れども、余は勸む、學を好み藝術を解するの士、餘暇あらば、請ふ漢學を修めよ、日本外史、蒙求、十八史略の如き解し易きものより入りて、文章軌範に進み、八家文に進み、史記に進み、四書を讀み、五經を繙き、諸子百家を伺ひ、離騷、文選を味ひ李杜の詩を誦せよ、かくて、支那哲學の大要を知るべく、支那文學の粹を知るべし

支那は、文字の國也。その辭章の美、世界の文壇に異彩を放てり、その莊重、崇高、雄大、警拔、沈痛、飄逸の美、之を我國に求め難し、且つや漢文學は二千年來我國第二の文學となり來れり、漢文を解する能はざるものは、十分に日本文學を解する能はざるべし。殊に文を作るものは、漢學の素養なかるべからず。今の文章は一般に器用になりたれど、文字を使ひてなす能はざるもの多く、生硬なる新熟語を用ゐ、更に下りて、熟語を誤用し、難澁、蕪雜、粗笨、冗漫なるなどゝ弊害百出するは、畢竟するに、漢學の素養なきの致す所也。

支那の哲學は如何に世に處すべきかを教へたるものにて、經書以外、その思想は詩にも、文にも、史にもあらはれたり。名言多く、警句多く、以て修養に資すべく

處世上の教訓となすべく、また氣象を皷舞すべし。これ漢文學の特色にして、日本文學には求め難し。出師表を讀んで泣かざるものは、忠臣に非ず、陳情表を讀んで泣かざるものは、孝子に非ず、史記の列傳、三國志、水滸傳を讀まば腕自から鳴るべし。李白の詩を誦すれば、塵世の外に逸出するの思あるべし。論語は、年長じて世故を經て、はじめて大にその味を解すべし。孟子殊に青年の氣を皷舞すべし。文學をはなれて、一般に世に處する上より言ふも、漢學の稗益する所は、きはめて大也。彼のいやに慷慨ぶり、豪傑ぶり、僞善的、道學的になるは、必ずしも正しく漢學に感化せられたるものにあらざる也。

讀書に就いて

書物は、人の精神上の食物なり、一日食せざれば、人の肉躰餓うるが如く、一日讀書せざれば、人の精神は餓ゑむ。然るに、世人肉躰上の快樂に耽りて、讀書の趣味を解せず、精神上の餓鬼到る處に滿てり。社會の趣味風尙の卑き所以なり。

讀書の第一義は、撰擇に在り、書物の夥しきこと充棟汗牛も啻ならざる今日、人はあらゆる書物に目を通し得べきにあらず。最も好き書物を選んで讀まざるべからず。古人の書物は、大抵既に定論あり、近刊のものも、一般の輿論あるものあり、批評あり、紹介あり、初學の少年は、先輩に問ひたゞすも可なり。斯く少し心を用ゐなば、撰擇を誤らざるに庶幾かるべし。

撰擇既に宜しきを得て、好書を得たる以上は、精讀といふことを缺くべからず。即ちよく咀嚼せざるべからず。食物を生嚙にせば、胃を害ふべし。書物を鵜呑にしては、到底完全なる知識を得らるべきものに非ず、古人も讀書百遍、意自から通ずと云へり。一つの書物を精しく讀むべし。多きを貪るべからず。いそぐべからず。解せざる所あらば、解するまで考ふべし。

更に之を客觀上より見れば、時間を利用せざるべからず。如何にいそがしき人に

ても、寢前朝飯前抔を利用すれば、日に二時間や三時間の餘暇は、たやすく得らるゝ者なり。毎日少しの時間にても可なり、之を讀書に用ゐなば、數年後の結果は極めて大なるべし。

之を主觀上より見れば、專念ならざるべからず。即ち精神を全く書物に入れ込めて、他の妄念を起すべからず。讀書する間に、心を動かし、遊びたし、酒をのみたしなど考へ、色々の物音を聞くにつれて、それ〳〵心を其方に引かれ、或は過去を懷ひ、或は未來を空想するやうにては、精神散逸して、專念なるを得ず、所謂心玆にあらざれば、聽けども聞えず、看れども見えず。かくて多く書物を讀みたりとて得る所は少なかるべし。

專念ならむにも亦其法なしとせず。之を主觀上より見れば、趣味を感ぜざるべからず。面白くなれば、自然に心之に向ふものなり。之に反して、いや〳〵ながら讀みては、心專なる能はず、動もすれば、欠伸を催すべし。而して趣味を感ずるに至るまでには、幾多の時日を要す。知識を得むとする熱心盛にして、好んで書を讀み、深く考へ、かくて理解力、思考力、判斷力增し、增すにつれて、次第に讀書の趣味を覺ゆるものなり。

又之を客觀上より見れば、腹の張りたる時、心地の惡しき時、眠くなりたる時、などを避けざるべからず。かゝる時は、到底專念なる能はざれば、暫く戸外に出で適宜に運動し、新鮮なる空氣を吸ひ、精神の狀態常に復するを待ちて、然る後、讀書にとりかゝるべきなり。

以上說きたる所、平凡、他の奇なけれども、讀書の要は、之につきたりと信ず。唯よく之を實行し得るものは、博學多識の士となり得べきのみ。

作文の心得二十六則

◉專門の文士にならずとも、ひと通り敎育をうけたるものは、ひと通り文章が書

けるやうになりたき者也。文章は達意を主とすべし。然し、たゞ意を達するのみにてはなほ足らず、篇を終るまで、面白く讀ましむるやうにせざるべからず。

◉青年の頃は、多く花やかな文章を好む者也、死語を臚列して見たり、むづかしい漢文をひねくつて見たり、耳遠い形容詞をやたらにならべて見たりして、所謂稗氣紛々たるを好むもの多けれど、文の極致は、語淺くして、意深きにあるべし。巧みを弄せずして、自から巧に、平淡なるが如くにして、曲折多く、才氣もあり精采もあり、品位もありて、よく人を刺激するを要す。人を動かさゞるは、これ死文也思想如何によさも、名文とは云ふべからず。用語措辭如何に美なるも、亦名文とは云ふべからず。人を動かさむとせば、唯筆先をひねくるのみにては不可也。直ちに作者其人を以てせざるべからず。人を泣かさむとすれば、己れ先づ泣かざるべからず。人を笑はさむとすれば、己れ先づ笑はざるべからず。人は誠意に動く。文を作つて人を動かさむとする者は、誠意なかるべからず。諸葛孔明の出師表が、萬古人を動かす所以は、たゞ一片の誠意を以て、文を草したるに出る也。即ち情熱ありて氣力壯にして、而して落着きて、鍛錬すれば、文自から巧なるべし。

◉彼の死語を臚列する擬古文は、參考に資するは可なり。之を模擬せむとするはこれ今の世に社祢をつけて歩行せむとする也。むづかしき語をならべて、こけ威しをなさむとするは、これ鬼面人を威す也。今後の文章は、字を見ずとも、聞きてわかるやうに注意すべし。必ずしも言文一致体ならずとも、「なり」「哉」等の文章語ありても可也。たゞ、その朗讀を聞きて、はつきりと意味が取れるやうにありたきもの也。余は、近時成るべく、この方針を取りて、文章を作り居れど、日本は、言葉の貧しき國にて、少し面倒な事を言はむとすれば、耳遠き漢語を臚列せざるを得ずされど、言ひ廻し方に苦心すれば、之を避け得ざるにも非ず。

◉明治の世、文章家多けれども、余は最も福澤諭吉翁の文章に感服す。平易流暢にして、趣味あり。言ふ所、至理に合して、その言ひ廻はし方、如何にも巧也。天

下の至文と言ふべき哉。翁は、偉大なる教育家也、又一種の事業家也。文章にうきみをやつしたる者にあらざるべけれど、其文に老いたると此の如し。耻しや、われは何を隱さむ、二十年來、文章にうき身をやつしたるも、天資諂劣にして、未だ福澤翁の域に達する能はず。之を要するに、今後の普通文は、言文一致体なりとも、文章語を用ゐるものなりとも、共に聞いてわかるやうにするを主眼とせざるべからず。誠意が根本なれども、餘り眞面目くさつた文の面白からざるは、なほむッつりとして陰氣なる人の、社交場裡に面白からざるが如し。さればとて、べら〳〵しやべるとが、社交場裡に面白からざるが如く、文章も餘り煩瑣なるべからず、精緻なるべし。冗漫なるべからず、簡潔なるべし。筆の廻らざるは不可也。加ふるに、觀察力に富み、神經敏にして、捉へ所を面白くせざるべからず。かくて、筆を執れば名文は作らるべき也。

◉文を作るには、歐文の趣味を解し、國文の知識あり、かねて漢學の素養なかるべからず。今の青年の文士は、漢學の素養を忽にするもの多けれど、これ文をよくするに、最も必要なる事也。出來得る限り、多く漢籍を讀まざるべからず。

◉知識をひろめむには、多讀せざるべからざれども、文をよくせむには名文を熟讀せざるべからず。更に進んで暗誦せざるべからず。其數は多きを要せず。

◉實用には、早く作ることが必要なれども、名文をつくらむとせば、大に鍛錬せざるべからず。ぞんざいに百篇作るよりも、練りて、五六篇作る方が、文章の上達するの途也。

◉作文の稽古には、難字を用ゐるもよけれど、難字を用ゐたるが故に、名文なりと思ふは誤れり。難字を用ゐて、こけ威しをなさむとするは、とんでもなき不了簡也。現今の處假名が多過ぎては讀み難ければ、漢字を用ゐるが便なれど、假名ならねば訓めぬ字、もしくは普通、人の目にふれぬ字などは用ゐざるを可とす。

◉漢詩なり、俳句なり、和歌なり、新体詩なりは、自から作ればよし、作らずと

も、平生誦讀すべし。すべて韻文は、鍛錬の餘に成りたるものなれば、かくすれば文を作りても、簡勁にして精采あり、趣味ふかし。然らざるものゝ作れる文は、冗漫にして趣味なきが常也。

◉意を達するは、文の第一義也。更に進んでは、人をして、面白く讀ましめざるべからず。なほ一層進んでは、人を動かさゞるべからず。冷血の人の文は、意をつくし理をつくすことを得べけれども、乾燥にして無味也。文章家は、情感の士ならざるべからず。

◉世には、句讀點をやかましく言ふものあり。歐文にありては、之なくては讀めざれども、日本文にありては、たゞ讀み易しといふだけにて、全く讀めざるに非ず之を用ゐるがよけれど、多くするも、少なくするも、一定するも、せざるも、人々の勝手にまかせて可也。嚴密に用法を定むるは迂なる話し也。

◉世には又送り假名をやかましく言ふものあり。漢字はもと借りて用ゐるまで也送り假名の如きも、慣用に從ひて、目に入り易きを主眼とすべし。強ひて一定するを要せず。

◎口語にて、過去をあらはすには、『た』の一語より外に無し。文章語にては、『けり』、『き』、『たり』『つ』、『ぬ』などあり。初學の士、その用法に迷ふべし。されどこれらの過去の助動詞は、みな一の意味に用ゐて可也。調子の如何によりて、『たり』を用ゐてもよければ、『ぬ』を用ゐてもよし。毫も區別するを要せざるべし。文法書には、多く區別したれど、これ西洋に過去、半過去、大過去の區別あるに倣ひて、強ひて區別したるものにて、日本文には、無用のわざ也。

◉文にも種類多けれども、まづ議論文、叙事文、抒情文の三者に分ちてよかるべし。議論文は、學識さへあれば、作り易し。叙事、抒情の二文は必ずしも學識の如何に關せず、抒情文も、情感さへあれば、作りやすけれど、叙事文は、又必ずしも情感に關せず。要はその事柄を讀者の眼前に躍動せしむるに在り。三者の中にて、

最も作り難し。むやみに精しく書きたればとて、狀況が躍動するものに非ず。繁簡その要を得て、趣味ありて、人を動かす書き方を工夫すべし。

◉叙事文の形容は、新奇を尙ぶ。されど、これ抒情文にありては、わざとらしくなりて、却つて不可也。

◉文章の技巧のみありたればとて、文士として世に立つこと能はず、文士たらむには、學問ひろく或は深からざるべからず、知識ひろからざるべからず、思想豊富ならざるべからず、觀察力にとまざるべからず、見識なからざるべからず、社會の事情に通せざるべからず。

◉冗漫煩瑣なるは、名文に非ず。然れども、少年の文を學ぶものは、思ひ切つて筆をのばすべし。はじめより、從然草、俳文、名家の短文の如きものを愛讀するは不可也。かくて、縱横自在、筆端窘束せざるやうになりて、はじめて、簡淨にして含蓄多きやうに工夫すべし。今の世、文士多けれども、この域にまで達せるものは、少きやう也。

◉石はいくら磨きても、石也。玉にきずありともみがゝば、光を發すべし。文は疵のなき普通の文よりも、疵のある名文を尊しとす。少年の文を學ぶものは猶更の事也。餘り文法などに拘泥すべからず。疵なきやうにと苦心するよりも、趣味あるやうにと苦心すべし。學殖進み、文法の知識進まば、疵は自から無くなるべし。

◉はじめは誤解かも知れざれど、慣用の久しき、自から別意を生じたる語多し。たとへば、人間といふ語は、支那にては、塵寰、浮世、人の住む處などの意をふくめど、日本にては、人、もしくは人類の意に用ゐる。此の如きは、今更、わざ〳〵支那の原意に復せずとも、慣用に從ひて可也。また連体言は直に体言につゞくが、文法上、正しけれども、漢文の訓みくせよりわやまりて、道を行ふの士などいふ如く、のの字を入るゝことあり。これ文法家の往々非難するところ也。されど、の字あるが爲めに、明晰となり、力あるやうになるものなれば、これを用ゐて、差支な

し。また上の道を行ふを体言同様にとりわつかひても可也。要するに、一般に是認せらるゝやうになりたる誤謬は眞の誤謬と言ふよりは變遷といふべし。

◉文の誓古には、むやみに形容を多くして、文を飾るもよし。これ、詞藻を豊富ならしむる所以也。されど、女が餘り多く白粉をつけ過ぎては、却つて見苦しきが如く、文も飾り過ぎては、却つて穉氣を帶ぶるもの也。

◉名文と否とは、外形よりも、むしろ内容にあり。内容が普通もしくは、普通以下ならば、如何に文字を美にするも、名文とはならざるべし。下らぬ内容を捉へて修辭に苦心するは、勞して効なきわざ也。文士とならむには、思想豊富、識見すぐれて、觀察奇警ならざるべからず。

◉才氣ある筆は、輕佻にながれ易く、莊重の筆は、自在なり難し。輕妙なるべくして輕妙、莊重なるべくして莊重なるは、眞に文に達せるもの、されど、今の世、未だ斯る人を見ず。

◉日本將來の文体は、言文一致体が普通となるべし。たゞ莊重典雅の趣を缺くがこの文体の缺點なれど、天才者出づれば、此缺點もなくなるべし。ともかくも言文一致体は、前途多望也。古人の精粕をなむるが、能でもなし。文才あるもの、苦心して、この文体を大成すれば、はじめて、不朽なるべし。

◉議論文を草して、たゞひと筋の正面の道理を記するのみにては、なほ物足らぬ心地す。他の疑をはさみさうな點に、氣をまはして、寸分も隙間のなきやうに論破せむと心掛くべし。かくて、讀む人は、痒き處に手の屆く心地すべし。たゞひと筋の正面の理路をたどるは、氣のきかぬわざ也。又着眼の迂濶ならぬやうにつとむべし。いかに巧に論述するも、着眼の點が迂濶ならば、さつぱり下らぬものとなるべし。又餘り折衷的の言を臚列すれば、勃窣となるべし。例を引くなり、譬を引くなりして成るべく、具体的になさむとするが、文に老いたるもの也。

◉文を學ぶに、餘り讀み過ぎては、却つて不可也。目が肥え過ぎて、我文が下ら

なく見え過ぎで、作る方がいやになりて、讀む方が、益々面白くなるべし。文を作るに、或る程度までは、盲目的自信あるを要す。作つては讀み、讀みては作り、目が肥えると共に、手腕も進み、双々相並んで進むを要す。讀むことゝ作ることゝは一方に偏すべからず。讀まずして多作するの非なることは、作らずして多讀するの非なるが如し。

◉文を精練せむには、幾度も稿を改むべし。決して煩をいとふべからず。たゞし余は十數年來、草稿をこしらへぬが習慣となり居りて、啻に速作の場合のみならず練りに練る場合にても、ぶッつけ書きにて、文字を改むること少なし。而して、練らぬ文よりも、練りたる文の方が、却つて改竄すること少なし。筆を下す前に、腹の中にて、練るなれば、筆を下せば、さまで改めずともよき也、此の如きは、むしろ惡癖也。惡癖とは知れど、今更あらため難し。もと余は文を作ることは好きなれど、字を書くことがきらひ也。さればまた書きなほさねばならぬかと思へば、非常に苦痛なるより、成るべく一遍にてすまさむとする姑息の念が、その一の原因となりたるやう也。

女子と手紙

賢母良妻として、文章の用ゐ處は、手紙をかくことに有之候。上奏文をかく必要もなく、檄文をかく必要もなく、議論文をかく必要もなく、優雅なる美文をかく必要もなく候。侍る、こそ、けれの擬古文をかいた處が、何の役にもたち申さず、たゝ手紙が達者にかけて、自由自在に意を達するを得ば、それで賢母良妻の文章上の能事は畢り申候。

在來、高等女學校などに於ける文章の教へ方、大にあやまり居候。讀本には中古文もしくは擬古文おほく、從つて、作文にも、擬古文を作らしめ候ふが、これがその誤れる點に候。成程、擬古文は、優美にて、女子に相應しきが如く候へども、少

しも實際に役立ち申さず、殊に中等教育程度の者が擬古文を作りたればとて、たゞ文字に拘束せらるゝのみにて、十分に意を達しうべきものに非ず候。文章は達意を以て主とせざるべからざるに、擬古の文体は、達意をよそにして、美なる外形を以て、優美に言ひあらはさむとするものに候へば、決して、中等教育に課すべきものには非ず候。たゞ文才あるものが、普通文を作る餘力を以て、擬古文を作るは、當に差支なきのみならず、洵に結構なることに候へども、主客を轉倒して、擬古文が書けて、普通文が書けざるに至りては、これ一種の不具に候。作文の眞意を誤れる者に候。普通文が野卑にして女子に適せざるやうなら、まだしも普通文なればとて、優美にかけざるものに非ず候。更に一歩進みて、普通文も、賢母良妻には、さまで必要ならず、唯手紙が書ければ、それで十分と存じ候。擬古文にて十分に意を達せむとは、專門の國文學者にても、なほ困難なることにて、これを中等教育程度の女子に強ふるは、無理に候。高等女學校を卒業せるもの、おぼつかなき古語をならべて、

擬古文らしきものを作るもの少なからぬやうに候へど、手紙がよくかけるものは、極めて稀なるやうに見受け申候手紙が書けざるにあらざるも、意盡さず、情盡さず、靴を隔てゝ痒をかくやうに覺え申候。かくては、文を學びたる甲斐無之、教ふるものも間違ひ居れば、學ぶものも不心得千万と存じ候。

擬古文は作る必要なし、普通文を作るべく候。普通文も作らずともよろしく、手紙かくことを學ぶべく候。その文体は、言文一致体にてよろしく、必ずしも書簡文体ならずともよろしく候。唯自由自在に筆が廻りて、意をつくし、情をつくせば、それで十分に候。

文はやりたし、書く手は持たずとは、古の教育なきもの〳〵述懷に候ふが、今の世の賢母良妻は、手紙かけざるにあらざるも、美事にはかけず。爲にやりたき處にやらずかいてやるも、たゞざつと用事を記するのみにて、筆を十分にのばす能はざるもの多く候。かくては高等女學校に學びたる甲斐なく候はずや。賢母良妻には、家

庭を治むるが、その主任に候へども、手紙をかゝざるべからざる場合、頗る多く、また夫の職業如何によりては、その代筆せざるべからざることもあるべく候。手紙をかくことは、實に賢母良妻に缺くべからざる一大資格に候。女子もそのつもりにて、手紙かくことに熟達せざるべからずと存じ候。

女子に限らず、男子でも、物名など漢字にてかゝねば、無學と見られて、恥にならむと思ふが誠に候へども、これも間違ひたることに候。漢學に達したる人とても、成るべくむづかしき漢字を用ゐずして、普通一般に通ずるやうな書方をするがよろしく候杜鵑、杜宇、子規、郭公、蜀魂、不如歸などかゝずとも、ほとゝぎすとかきてよろしく候。心太とかゝずとも、ところてんとかきてよろしく候。かゝる類を漢字でかゝねばならずと思ふより、手紙かくことが、おつくうになるべく候。たゞ假名遣は間違へぬやうにありたきものに候ふが、これは中等教育をうけたるものには、困難なることにはあらざるべしと存じ候。

今日用ゐ居る女子の書簡文は、男子の書簡文と異なる所有之、無暗に多くを用ゐ候へども、手紙とても、わざ〳〵男子のと異ならしむるを要せず、男子と同じ書方にて可なるべしと存じ申し候。女子の手紙かくにつれて、必要なるは、筆蹟に候。文字がぞんざいにして、きたなく、且つ拙く候はゞ、その人品も何となく下等なるやうに思はるゝものに候。之に反して、手紙の文字美なれば、その人品もゆかしく思はれ申候。女子も高等女學校を終るまでには、成るべく多く習字の稽古したきものに候。たゞ字を習ふのみならず、細字をかくことにも熟したきものに候。筆蹟達者にして且つうるはしく、その手紙の文も縱横自在にして、かゆい處に手の屆く如く、趣味あり、情味もあり候はゞ、啻に用事を辨ずるに都合よきのみならず、その人品にも、ねうちがつくものに候。

女子と高等教育

賢母良妻、これ今の社會の大多數の要求する所、余輩も同意也。賢母良妻とならむには、學問の方は、まづ高等女學校を卒業すれば、十分なるべし。されど、女子がすべて、中等教育以上の學問を學ぶに所なきやうでは、隨分窮屈な話し也。

今の世に、紫式部、和泉式部、清少納言のやうな才女なしとも限らず。否、亡き稅所敦子刀自は、其の歌の力拔群也。之を他の御歌所の高崎、小出の輩に比するに、むしろ優りたり、亡き一葉女史は、その小説、男子の作家に比しても二流以下には下らず。時に第一流の男子の作家にまさる節もあり。その他、學問に、教育に、普通の男子よりも遙に傑出せる女子少なからず。かゝる才力を有する人をして、中等以上の教育をうけざらしめむとするは、餘りに無情也。

普通大多數の女子は、中等教育を終れば、良妻となるべし、賢母となるべし。されど、秀才の女子にして特志あるもの、五六年嫁期をおくらすも、よしや、一生嫁せざるも、大に其所長を發揮すること。却つて社會の爲めになるべし。これ特例として許すべし。決して、女子一般を律すべからず。

また中等教育を終はるも、家の貧なるものや、顔の醜なるものは、容易に賣れざることあり。賣るゝも、よき所には賣れざることあり。かゝる人は、奮發して大に學んで自活せむとするも面白かるべし。自活せずとも、嫁入の一資格を得むとするも、亦妨げず。

女子が男子にすがり、依頼する間は、いつまでたちても、男子の奴隷也、男子の玩弄物也。さまで結婚をあせらずとも、ゆつくりと自活自營の道を講ずべきなり。

これ賢母良妻の教育主義に反對するものに非ず、また結婚する莫れと強ふるものにあらず。余輩は、例外あるべきことを認め、少數不幸なる女子のために、斯く言ふもの也。

傳記と女子

女子もし安心立命を佛敎に得れば、結構也。之を耶蘇敎に得るも、結構也。下りて天理敎、蓮門敎に得るも、亦妨げず。されど、今の下らぬ宗敎に安心を得るほどの迷信なくんば、退いて自から古今の女子の傳を讀め。

伴侶を好むは、動物の通性也。旅にも路づれあるがよし、學校に行くにも路伴あるがよしとて、近所の子供同士は誘ひあひてゆく也。花も、芝居も、ひとりで見るよりも、氣に入つた人と共に見るが面白し。ひとり見るとも、歸り來りて、之を話して見たくなる。世人に、かゝる情あるは、これ人が社會的動物たる所以也。この情は、之を生きたる人に求めて得られずんば、古人に求めむとす。是に於て、傳記、世に多く讀まる。

五百の羅漢の中には、我が思ふ亡者に似たるものありとて、人は羅漢寺に詣づとかや。文字を解する女子、せめて五百人の女子の傳記をよみて、之を我心に融化すれば爲めに奮勵せらるべく、慰籍せらるべく、敎訓せらるべく、心中に絶えず話相手あるべく、逆境にたちても、苦痛なかるべく、即ち安心立命が得らるべき也。

學生の娯樂

人は、一生を通じて、娯樂とするものなきを得ざるべし。娯樂は、心靈上の食物也。身体に、食物を要するが如く、精神上にも、亦之を要する也。

年齡、職業、身分の如何によりて、娯樂とする所に差異あるべし。青年の士、いつまでも稚氣を存して、小兒の眞似をなすべきに非ず、また早く生意氣になりて、身分を忘れて、紳士の眞似をなすべきに非ず。

學課、もしくは職業が、唯一の娯樂となれば、洵に結構也。されど、學課職業以外一つやそこら、娯樂とするものがあつても差支なし。否、本業以外、何か娯樂と

するものがある方が身体上にも、精神上にも却つて益あるべし。たゞ本末を顚倒せざるを要す、本業をお留守にして、娯樂にうき身やつすべからず。

娯樂は、人の好きゞなれば、必ずしも之を畫一にすべくもあらねど、小兒なら小兒、紳士なら紳士、青年なら青年で、大体の見當はつくべし。

飲食物を娯樂とするは、老幼を通じて斷じて不可也。之を娯樂とするは、動物の事也、もしくは下等の人民の事也、紳士的に非ず、飲食は、身体の榮養を缺かざるまでを程度とすべし。食道樂となるは、極めて下等也。

衣服、身のまはりを美にし、もしくは意氣にするを娯樂とするは、一種の婦女子の事也。衣服などは、身分相當にして、不潔ならず、寒暑をさくるを程度とすべし。

圍碁、將棋、骨牌、花合などは、學生は、娯樂とせざるを可とす。碁、將棋などは無事に苦む老人にありては、この上もなき消閑の具なるべけれども、學生、もしくは業務の忙しき人にありては、啻に時間を空費するのみならず、また身体を害す。

決して耽るべきものに非ず。

學生の娯樂として望ましきは、運動に關する事也。角力可也、擊劍可也、柔術可也釣魚可也、鳥打可也、乘馬可也、遠足可也、旅行可也、器械体操可也、ローンテニス可也、ベースボール可也、漕舟可也、水泳可也。學生は何か一つ運動に趣味を感ずるものあるを要す。學生のみならず、老幼ともに、亦然るを要す。今の世、學生の時代には、運動を好むもの多けれども、紳士となれば、頓に之を廢して、毫も運動せざるもの多し。運動を盛にする間は、少しぐらゐ過食しても差支なけれど、運動せずして過食すれば、その結果、忽ち身体の上に影響す。即ち、胃病となるべし、諸種の病をかもすべし、從つて精神の活動も、にぶくなるべし。今の紳士に、ぶく〳〵と肥りすぎたるもの多し。これ運動せざるによる也。人は、一生、適宜に運動せざるべからず。學生時代、殊に然りとす、其運動もいや〳〵ながら爲しては、なほいや〳〵ながら物を食ふに同じ。いづれも、それだけの効果なし。さればとて、

嗜好に乗じて、本業をうちすてゝ、運動にうき身やつすも、飽食と同じく不可也。運動家に勉強家なしといふが如きは、大に戒むべきこと也。好むことを適當にするといふことは、これ意志を練る所以にして、この氣風を養成することは、修身上にも、處世上にも、きはめて大切なることゝす。

運動の外、文藝に關する者を娯樂とし、感情を高尚にし、もしくは、志氣を卓勵せむとするは、紳士の一資格としても必要なること也。然し野卑なる小説を愛讀して、誤つて、其小説の主人公たらむとすべからず。たゞ利を解し、肉慾を解して、毫も文藝の美を解せざるは、教育をうけたるものと云ふべからず。語に曰く、武士は物のあはれを知ると、今の世の紳士も、この覺悟ありたきもの也。文藝は、必ずしも人を軟化するものに非ずして、人の感情を醇化するもの也。凡そ美に自然美、文藝美、人間美などあり。學生の間は、自然美、文藝美を解すべし。人間美は、紳士となりて後解するも、未だ遲しとせざる也。

青年の氣象

單に年齢の上より云へば、二十歳前後が青年也。されど、實質の上より云へば、青年にして老人なるものあり。老人にして青年なるものあり。青年にして老人なるものは、其人自から老朽す、年はとるも、心いつまでも青年なるものにして、はじめて、大事業をなすを得べし。古人曰く、英雄とは小兒の心を失はざるもの也と。余は更に之につけ加へて曰はんとす、英雄とは、青年の氣象を失はざるものなりと。

青年の特色多けれども、進取不撓の氣象がその第一の特色也。たとへば、初夏の新緑の如し。如何にも、いきいきして爽快也。人生の事業は、實にこの氣象に成る、如何なる樹木も夏の初になれば、新緑を帶ぶるものなると同じく、如何なる人も、青年時代には、この氣象を有す。たゞその氣象に強弱あり。強きものは、進歩し、弱きものは進歩せず、早く之を失ふものは、早く老朽し、いつまでも之を失はざる

ものは、大に成功す。

青年の時代には、この氣象充滿するを以て、勇往邁進、水火に入るも避けず。古來破壞的事業は、多く青年の手に成れり。されど、青年も學校を出でゝは、生活の心配あり。妻子などの係累あり。如何に遠大の志をいだくも、目下の急務、衣食せずには居られず。先輩に頭をさげて、糊口の途にありつけば、之を失ふが氣にかゝり、心にもなきお世辭も言はねばならず。この男一匹が僅々數十金の月給にしばらるゝかと思へば、情なくもなり、妻が出來、子が出來て見れば、思ひ切つた事も出來ざるやうになり、全く運動を廢し、人車電車にのりつくれば、體力自然に衰へ、當年の氣象、漸く消磨せんとす。危い哉。

青年にこの氣象あるは、當然の事也。たゞ社會に處するに至りては、十中七八は、之を失ふ。之を失はざるものにして、はじめて稱するに足る、死ぬるまでも、之を失はざるものは、更に偉とるに足る。『秋風や白木の弓に弦張らむ』と、去來の吟じけむこれ實に青年の氣象を失はざるもの也。青年の士、請ふ心せよ、困苦と戰ひ、病氣と戰ひ、貧賤と戰ひ、失敗と戰ひ、情實と戰ひて、この氣象を失はゞ、そは、凡人也。凡人と偉人との區別は、この氣象を失ふと否とにあり。知らず、卿等は、如何にしてこの氣象を失はざらむとする乎。

青年の不平

青年の氣慨あるは望ましきこと也。されど、一歩あやまりて、慷慨悲歌の徒となるは、大に不可也。更に下りて、厭世枯淡に陷るは、最も不可也。

氣慨あるは、志を立て、主義を有し、その業を成し、かねて世を濟ふ所以也。されど、氣慨のみありて、智識なく、才能なく、分別なくんば、氣にくはぬとのみ多くなりて、悲憤して絶叫するやうになるべし。いよ〳〵その憤慨の効なしと知りては、絶望して、自暴になり、却つて反動にて、大に墮落する者もあるべく、おとな

しきは、厭世家となりはつる者もあるべし。あやふい哉。

人生讀書憂患始と、蘇東坡の咏じけむ、概して、青年は理想高きものなるに、現に觸接する社會は、きはめて卑近也。見るに、聞くに、癪にさはること多し、殊に青年時代は、概して、理想は高かるべきも、その割合に、思想は幼稚也。世間を解することあさく、思ひやりも少なく、常識も足らず、分別も乏しく、何事もいちづにさうかと信じ過ぎ、融通がきかず、自惚の最も強き時代なれば、自身のすることをよしとのみ思ひ、人のあらがよく目につき、利已とまでは行かずとも、万事己を空しうすると出來ず。要するに、情がよく熱する割りに、理性は發達せず、よく意志をねるほどに多く社會と觸接し居らず。その中にも氣慨のなきものは、不平もなけれど、氣慨あれば有る程、不平多し。正當なる不平は、青年のみならず、何人にもありてよき事なれども、世間知らずの青年の血氣の餘りの不平は、わき道にそれて、分つた人より見れば、没條理なること多し、青年時代は、自分の修業が第一に

て、先づ自家頭上の蠅を追ふべき筈なるに、早くも國家を鹽梅する大臣を氣取り、もしくは一世を指導する教育家を氣取り、我身の勉强をよそに、空言を吐き、空想にふけり、天下を廓清せむなど〳〵氣張るは、本氣の沙汰とも覺えず、その志の大なるは喜ぶべけれど、大なる志をとげむには、才も亦大なるざるべからず。修學中の青年にして、身分不相當に、本職を忘れて、天下を以て身から任ずるも、竟に所謂志大才疎の弊を免れざるべし。國家の大事とまでは行かずとも、わづか二三の惡例を見ては、世は澆季也、人心腐敗しつくせりなどと絶叫し、教員の惡事をきゝかじりては、學校動騷を起し、朋友の爲めなど〳〵して、餘計なる事をして見たり、賄征伐など〳〵下らぬ騷動を起し、啻に我身の修學を妨ぐるのみならず、一時の血氣の爲めに、一生を誤るもの少なしとせず。かゝることに、氣慨を有するは、必ずしも惡しとにあらねど、本末をわすれ、分別もなくして、下らぬことに心血を灑ぐが惡き也。

∵青年の士が、血氣あまりありて、分別足らぬが爲めに、社會に對し、學校に對し、

先輩に對し、朋友に對し、不平を起すこと多けれども、年とりて、分別つきて考へて見れば、後悔すること多かるべし。二十歳にして、十歳の事を顧みれば、ばからしと思ふと多く、三十歳にして二十歳を顧み、四十歳にして三十歳を顧み、五十歳にして四十歳を顧みるも、いつも同じ感あるべし。古人も四十九年の非をさとると云ひけむ、少しばかり書物をよみかじりたりとて、人生の是非がわかるべき筈の者に非ず、青年の士の血氣は、之を其修業の上にそゝぐべし。之を濫用して、下らぬことに不平を起して、一生を誤るなくんば可也。

先輩

先輩となれば、後進をひきたつべき筈なれども、人の性分にて、世話するを好むものあり、好まぬものあり、また好むも、わが研究を妨ぐるを恐れて、あまり世話しやうとせぬ人もあり、先輩が後進の世話せずば、後進は社會に出づるに由なくて、空しく不遇をかこたざるを得ざるべし。さは云へ、先輩も後進をひきたてむとして、時間を空費したり、金錢を空費したり、色々な迷惑を被つたり、損こそすれ、我身のとくにはならぬもの也。然るに、毫も之を顧みずして、偏に後進をひきたつることをつとめ。高等桂庵と云はれても、辭せざる人あり。仁なる哉

學者、文人、美術家の中にも、かゝる人あれども、職業によりては、ちと考へ物也。むかしは、弟子を取つて教へたる者なれば、自然、後進をひきたてざるを得ざりしかど、今は如何なる學問、藝能にも、學校ありて、師弟の關係、むかしのやうに密接せず。もとより先輩の士は、超然孤立すべくもあらざれど、又餘りに世話することに身を入れすぎては、我が身の勉强がお留守になるべし。

むかしは、誰々の門人といふことは、一の肩書なりき。弟子は師によりて世にあらはれ、師は弟子によりて後世につたはれり。著書なく、よい弟子もたぬ人は、如何ばかり學力あるも、後世に傳はらず。例へば、木下順庵の如きは、詩文の伎倆、當

時にありては、群をぬきたれど、格別の事はなし。これといふ著書もなけれど、白石、鳩巣、芳洲の如き、よい弟子ありたるが爲めに有名也。順庵以上の學力あるも、弟子、其人なくて、世にあらはれざりし學者多かるべし。今もなほ文壇に師を氣取り、弟子を氣取るものなしとせざれど、これ二十世紀的に非ず。人の世話は相當にして、一生我修養に全力をそゝぐべきは、學者、藝術家のつとめ也。

男女の交際

あはれや七歳にして、男と女と席を同じうすべからずと、おさへつけられたる國民は、一生、男女交際の味を解することゝ能はず。男、家をなせば、つれ添ふ女あれども、これ交際して面白きものよりも、家婦として適當なるものを選ばざるを得ず。酒前のなぐさみには、學問もなく、しつけもなき、あばずれ女が面白けれども、かゝる女は到底中等社會以上の家婦とすべくもあらず。物は、兩立しがたし、家婦として適當なる女に、男の相手をよくせよと强ふるは、無理な話也。この間の消息は、「拙手なのを嫁にと思ふ蹄哉」の一句につきたり。日本の女は、はじめより妻として教育せられ、男は、妻と交際するを得るのみにて、終に女と交際するに由なき也。

社交的動物たるは、人の人たる所以なり。男女の交際も、その社交を好む性情より出でたる自然の結果也。その社交を好む性情よりは、男女間には、男同士の間に求むべからざる一種の情味あれば也。歌がるた取るにしても、女がまじり居らずば、面白からず。酒を飲むにしても、男の酌には、うまからず。かくて、人は男女の交際を求む、男女の交際は、兩性の特長、知識を交換するにありなど云ふは、村學究的の迂言也。

道樂は、眞の道樂のみにあらずして、一種の練習なりとせられしが、男女の交際開けざる間は、やはり一種の練習なるべし。練習とまで行かずとも、社交的性情を滿足せしむる一種の手段也。男女の交際ある國には、花柳界あるも、そは、一種の

體慾をみたすだけの方便とするに過ぎず。男女の交際開けざる國にありては、花柳界は、男女の交際場也。そこには、學問も、知識も不必要也。たゞ異性との交際家として、一種の手腕を要す。

男同士の交際にありても、地位を忘れ、身分を忘れて、汝爾相呼ぶ處に、眞の情味あるべく、異性の交際も、亦然り。春の夜寒に、酒ひとつたべ過ぎて、おゝ暑やのとお政が甘つたれる處に、男女交際の情味はあるべし。武士の女房が、こちの人どうしやさんせとも云はれまいとて、慇懃に三つ指ついて、自から然るべう存じまするとて、鹿爪らしくなりては、これ夫と妻との交際也、男と女との交際に非ず、言語にても、上等社會の用語はうまみなくして、下等社會のに性情の躍動するものあり。これ儀式ばると否とに由る也。男女の交際が、上流社會的より遠ざかりて、下等社會的になるは、人情自然の傾向也。粹客が吉原よりも、小塚原に遊ぶを面白がるといふも、このわけなるべし。

男にありても、文人的氣質は、社交上には面白けれども、事業上には不可なるが如く、男女交際に適する性格の女は、家婦としては、不可なるべし。されど女は男にすがりたがるもの也。自活して、情夫を養はむとの意氣込ある女は稀にして、運よくば、玉の輿にと思ふが常也。下りては、金さへあれば、妾でもと思ふべし。無妻といふことは、花柳界にもてる一大要件也。お客の域を通りこして、未來の旦那の域に至らば、これ男と女との交際が、夫と妻との交際にならむとするものにて、男女交際の眞意はなくなるべし。

男女交際の眞味を花柳界に求むるは、眞の通人なるべし。人は誰も殿さまになりたきものなるが、社會にありては、殿さまになるを得難けれども、花柳界にては、誰でも金さへあれば、殿さまになるを得るものなれば、こゝに一時殿樣風をふかして、自から喜ぶも多かるべし。男友交際の眞意には少しはづるれども、鼻下長にさること萬々也。

失戀

人の一生の中、青年時代が、最も危險なる時代也。この際は、希望も大なる代りに、失望も亦大也。爲めに一生を誤る。自殺といふとも、此時代に最も多し。失戀といふとも、この時代に起る現象也。憐むべし、青年初心の輩、色男となるの秘訣は、耻を忘るゝにありといへる粹人の域にまでは進歩、否、墮落せず、見初めて、思ひそめて、ひとり心をなやますと、幾月、もしくは幾年、漸くのことにて、死ぬるよりも苦しき思ひして、袖をひけば、案外につよき肱鐵砲、無慘や胸をうちぬかれて、世界は忽ち暗黑となりぬ。或はうれしき逢瀬も昨日の夢、金に見かへられ、地位に見かへられなどして、恨をいだく男もあるべく、秋の扇とすてられて、泣き明かし、泣きくらす女もあるべし。如何なる名醫も治するを得ざるは、失戀病也。釋迦も孔子も、これには冷か也。失戀の苦痛は、失戀ありしものゝみぞ知る。

物には必ず表裏二面あり。戀愛が精神上の醍酒にして、人を興奮し、慰藉することの大なると同じ程度に失戀の苦痛あると、また止むを得ざる所なるべし。戀愛なくんば失戀もなし。失戀の苦しきは、即ち戀愛の樂しき所以也。さるにても、安全なるは、戀愛の何たるかを解せざる人也。既に戀愛の何たるかを解せざれば、失戀の何たるかをも解せず。女子に對しては、たゞ獸慾あるのみ。利害損得より打算して、男女の關係成立し、一家成り、社會なる。耻を忘れて、色男となる。失戀は藥にしたくもなし。かくて、その身は安全なるべし。されど、家庭は冷か也、社會も冷か也。

男子生れて業平となる能はず、墮落して耻を忘るゝ能はざるものが、戀愛の醍酒に醉はむとせば、失戀の苦痛あるを免れざるべし。古の賢人も言ひけむ、如かず、賢を賢として、色にかへむには。

妻帶の得失

夫婦は、人倫の大本なるに、何が故にか、妻帶の得失を論ずる。

『とても世にながらふべくもあらぬ身のかりの契をいかで結ばむ』といふが如き境遇ならば、妻帶せざるが可なるべし。今の世、正行の如き境遇なしとするも、世界を股にかけて冒險的行爲をなさむとするものは、妻子なきを可とす。

妻帶は、必ずしも色慾にのみ基づく者に非ず。伴侶を求むるは、人類の通性にして、其よく社會をなす所以也。伴侶もひと通りの伴侶にては不可也。親しきを要す更に達みて、遠慮なきを要す。更に進みて氣の張らざるを要す。親子兄弟は親しけれども、なほ多少の遠慮あり。親しき友になれば、遠慮なきものなり。されど男同士なれば、氣の張るあるを免れず。夫婦に至りては、遠慮もなければ、氣の張ることもなし。時に犬もくはぬ喧嘩をなすも、これ親しさの餘り也。卑俗なれど、屁も嗅ぎ合ふとは、よくこの間の消息をあらはせり。

自尊の氣に富み、材能を負ひ意志强く、理性明かにして、覇氣滿々たるものは、眼中人なし、從つて伴侶を求むるの情うすし、されど、情に富みたるものは、人に依賴せざるも、人をなつかしがるもの也。氣よわきものは、なほ更也。かゝる人は妻を得て、精神上の平和を得べし。終日外に出でゝ、屈托多きも、歸りて妻の笑顏に迎へられて、爲めに慰めらるゝことあるべし。心配性にて、常にくよ〳〵思ふ人は快濶無邪氣にして、元氣よく、笑聲多き妻を得れば、爲めに元氣づきて、よろづ活潑になることあるべし。ひとりにては寂寞に堪へざるもの少なからず。かかる人は、よしや妻帶するが爲めに、失費多く、係累多くなるも、なほ妻帶するが可なるべし女なき殖民地の繁昌せざることを、單に色慾のみの故なりと思はゞ、大に誤れり。

女學校の男教員を始めとし、妻なくては、信用を得ざること少なからず。又妻なくては、餘り覇氣ありすぎて、一職に安住せざればとて、妻をくゝりつけむとするも

のあり。又妻なくては、之を花柳界に求めて、品行わるくなる人多し。要するに、妻帶といふことは、人類自然の性情に出でゝ、社會の成立、秩序、安寧に大なる關係を有するもの也。其代りに負擔多きは、自然の勢也。負擔に堪へざるものは、妻帶をおそくし、もしくは見合はすの外なし。

折角の才女も、妻となりて、その才藝の進歩せざるものあり。學問、文藝に忠實ならむとするもの、冒險的行爲をなさむとするものなど、妻子あるが爲めに、十分にその志を遂げ得ざるとあり。結婚は必ず萬人に強ふべきものに非ず。日本人は概して、早婚に失する弊あれども、そは結婚の遲速の問題にして、妻帶の得失の問題にあらざれば、また茲に及ばざる也。

愛の三變

幼にしては親に從ひ、長じては夫に從ひ、老いては子に從ふ。之を女子の三從といひしとかや。從と云へば、從なれども、又之を一方より見れば、愛とも云ふべし

幼にして最も愛する所は親也。我をかはいがつてくれて、何でもねだるものを買つてくれて、世に親はどなつかしきものなし。かくて、年頃になれば、又一の愛生ず『世の中に戀しきものは父母の外にあらじと思ひしものを』とは、よくこの情をうたへり。『父上樣は非業の死でもお年の上、勘平さんは三十に、なるやならずに死ぬるのは、さぞ悲しからうくやしからう』と云へるお輕の述懷も、この情を言ひあらはせるもの也。たしなみある女は、まさかこのやうな事は、口にせざるべけれども、心は誰もかくあるべき筈のもの也。死なば一つ穴、二世も三世も女夫ぞと思ひしも長く添うて見れば、さほどにもあらず。初婚の夜の心持は、いつしか忘れて、女の横着なるに愛想つかす夫もあるべく、男の意氣地なきに愛想つかす妻もあるべし。今となりて、最も可愛さは、我子也。かたはの子は、なほ更かはいらしとかや。わが身の着るものをはいで子に着せ、我が食ふものを食はずして子に食はす、子が可

愛さに、子の缺點は目に入らず、子のする事は、何でもよき事なりと思ふ。世之を稱して、親馬鹿ちやんりんといふ。

以上の三愛は、人が動物としてもつて生れたる性情也。敎へずとも、自然に之を具ふる也。幼にして親を愛すとは、必ずしも親孝行の事に非ず。人は利己的動物なるが、幼にしては殊に甚し。而して幼者をして、よくその利己の性慾を逞しうせしむるものは親なれば、之を愛す。危い哉。これ動物自然の情なれども、人として敎育をうけたるものは、この際、利を以て親を愛するのみならず、よく親を敬し、親の恩愛に酬いむことをはからざるべからず。親の恩愛に酬いむには、必ずしも雪中に筍をほるを要せず。よく親の命を奉じ、學藝をはげみ、よき人にならむと勉むるの謂也。

妻となりて、何よりも夫を愛するは、さもあるべき事也。されど夫に對しては、妻なれども、社會に對しては、人也。姑を馬鹿にし、小姑を邪魔にし、生の親にさへつらく當るやうな女ならば、恐らくは、夫を愛する如きも、眞に夫その人を愛するにあらで、夫の富を愛するなるべし。恐しや、〳〵。

三愛の中にても、親が子を愛する情ばかり純潔にして、切實なるものはあらず。燒野のきゞす、夜の鶴、たとへ得て妙也。而して愛に溺れて、子をあやまるもの多し。親として戒むべきは、この點に存す。

人は動物也、神に非ず。萬事動物の域を脫すべくもあらねど、人に敎育あるは、動物の域より一歩神の域に進む所以也。虛儀、虛禮、餘り人情をはなれて、義理ばるも、非なれども、餘りに動物的本能を暴露すべきに非ず。古の人が子を愛せよ、夫を愛せよと說かずして、親に孝なれ、貞節を守れと說きたるの意をくみわけざるべからざる也。

困つた女六種

◉女の氣の大きすぐるは、困つたもの也。一家の妻たるものは、よくしまりて、小心翼々として、妄りに濫費せざるやうにせざるべからず。氣が少しでもゆるみては、しまりが付かず、一家の經濟上、非常なる損害あるべし。

◉女の酒を好むも、困つたもの也。酒のめば自然氣が大きくなり、なげやりになり、色々な過失をしでかすべし。酒のむ時の相手には、飲める口の女がよけれど、一家の妻としては、甚だ不可也。飯むも、二三杯のめば、直に赤くなる女こそしほらしけれ。尤も家を嫁にゆづりたる老女にありては、必ずしも此限にあらず。

◉女の强情なるも、困つたもの也。男は智惠あるか、藝能あるかなれば、强情なるも、その强情が却つて爲めになることあり。されど、女の强情なるは、始末が付き難し。女は、家婦として、夫に事へざるべからず。また舅姑に事へざるべからず。

從つて、すなはなることは、何よりも先きに必要なること也。

◉女のなまけものなるも、困つたもの也。中等以下の家婦にありては、一日の要務頗る多し。下女なき家は、朝早く起きて、飯をたかざるべからず。夫や小兒に辨當こしらへてやらざるべからず。衣服も見苦しからざるやうにしてやらざるべからず。垢つかぬやうに洗濯せざるべからず。室内もきれいに掃除せざるべからず。何から何と、細かな用事頗る多ければ、いそかしく立ち廻らざるべからず。家婦がぶしやうものならば、家の内だらしなく、殊に臺所がだらしなく、戸棚の中が亂雜になり居り、夫には垢つきたる衣服を着せ、子にはほころびた衣服を着せ、從つて經濟もうまく立ちゆかず。よろづにつけて、損失が多き也。

◉女の不規律なるも、困つたもの也。出したものは出しッぱなしにし、話しが面白くなれば、おみこしがすわりて動かず、物を整頓しておかず。いざ入用となれば大騒ぎしてさがすも、容易にみつからず。これ畢竟するに、不規律なるに由る也。

家婦たらむものは、何事も順序正しくし、必ず物を整頓して、おくやうにありたきもの也。

◉小才を恃みて、利口ぶる女も、困つたもの也。まことの智惠あるにあらねば、わけがわからず、何事も自分のするをよしと思ひて、高くとまり、人を見下し、人の言を用ゐず、教育してやらむにも、手のつけやうなし。牛うり損ふも、かゝる女なるべし。

妻の重荷

女の男に望む所少くして、男の女に望む所何ぞ多きや。

女とても、わざ〳〵多く望まざるに非ず。財産あり、學問あり、地位あり、賢にして情あり、色白くして風采よければ、これに越したることはなけれども、そのやうに慾張りたりとて、[illegible]ものならねば、大抵の處にてあきらめをつけて多くを望まざる也。情のあつき人ならば、醜男子なりとも可なり、學問が出來れば財産はなくとも可なりなど、たで喰ふ蟲もすきゝ、それ〴〵あきらめをつけて、一生をうちまかして、不足を言はざるが常也。

之に反して、男の女に望む所は、頗る慾張る。美人なちざるべからず、學問も出來ざるべからず、琴、生花、茶の湯などの藝なかるべからず、賢にしておとなしからざるべからず、裁縫も出來ざるべからず、家政に長せざるべからず、交際も上手ならざるべからず、[illegible]なほ更結構なりなど〻、人の慾に限りなし。もしその望む所がかなはざれば、はじめ目につきし女房も、直に鼻につく。さりとは、餘り無理ならずや。

男は、女の美なるを望む。されど家婦たるものが、朝から晩までお化粧のみして居らるべきものに非ず。且つ色は年と共に衰へ易し。美なる女も、子の三四人もうむうちには、その顔やつれざるを得ず。夫たるもの、これをこれ察せずして愛想つ

かすは、不人情も亦甚しと云はざるべからず。

遊び相手、酒の相手に面白きものと、一家のしまりをよくするものとは、兩立すべくもあらず。妻は一家をとりしまるものなれば、じみなるがあたり前也。世上の男子、藝者や酌婦に求むる所を以て、之を妻に求め、その無趣味なるを尤むるは、大に誤れり。

嫁と姑

姑と嫁とは、多く衝突す。衝突せずとも、瓦に心に隔ありて、生の親子の如くに親まざるが常也。

新夫婦別居するがよきや、否やは、茲に之を説かず。たゞ姑も同居して都合よきと多し。年若き夫婦が、姑小姑に氣兼するとなく、氷入らずのさしむかひ、杯を共有し、一片の肉を喰ひあふと、世に氣樂のかぎりなるべけれど、世事になれぬ若き

嫁は、よろづ氣がつかぬ事多く、ぬかりも多く、馬鹿な目にあふと多し。老練なる姑を顧問官とすれば、益をうること多かるべし。子生みたらむ場合には、姑あるが殊に都合よし。ばあさん育ちは、賣つても、三百ねが安いと言る〳〵くらゐ、よく孫を可愛がるものにて、その餘弊もあれど、概して子を育つる上には、手ぬかりなしわけがわかつて居りて、粹をきかして、邪見なる處なき姑ならば、同居してもらひたきもの也。姑たらむものは、嫁の教育家監督者たる考を有せずして、顧問官たる考を有せざるべからず。一家の主權は、嫁にいさぎよくわたして、眞に所謂御隱居樣とならざるべからず、畢竟するに、上皇もしくは法皇となりて、なほ院政をきかむとするより、嫁と姑との内訌は起る也。

妻と女子

妻には女子がなるものなれども、妻君といふこと、女子といふことゝは、全く相

一致するものにあらざること、なほ亭主には男子がなるものなれど、亭主といふこと、男子といふこと〻、全く相一致するものにあらざるが如し。亭主として望ましきは、世間の公益に奔走せずとも、私を營み、妻を大事がつて、常に帶や着物を買つてくれ、家を富ますことのみを心掛けて、子孫の計をなしてくれるに在り。されど、男子一般に望むべき事に非ず。國家をよそに、社會をよそに、人道をよそに全く私のみを營まれては、たまつたものに非ず。女子の方は、男子に比すれば、女子としても要求少なけれども、妻女としてのみ要求すべきものにもあらざるべし。野郎のみのよりあひにては、餘りに殺風景也。女子は社會の花たらざるべからず、交際場裡の花たらざるべからず、而かも藝妓酌婦の如く、男子の玩弄物たるべからず。心のやさしき女子、社會に幾多の慈善的事業あるべし。感情に熱して神經の過敏なる女子、文學美術をはじめとして幾多の藝能あるべし。社會は、女子を妻君としてのみ要求するに非ず、男子の玩弄物としてのみ要求するに非ず、男子に眞似の出來ざる外形、心情、技能に於て、男子の外に、女子を要求す、女にすたりものなし。顏が十人なみにして、體が不具でさへなければ、何は出來ずとも、誰かゞ妻君にしてくれて、飯をくはしてくれるなりとて、獨立心なき間は、白樂天の百年の苦樂他人に由るの境遇を脫すること能はざるべし。

女子と小人

女子と小人とは養ひ難しと言ひふらされたるは、餘りに女子を見さげたる言なるが、かゝる言の出づるには、多少その理由あるべし。

女子の天性は、或は無邪氣にして、快濶に、おとなしくして、さつぱりしたるものなりしやも知れざりしかど、東洋古來の教育習慣は、女子を無理におとなしからしめ、室ふかく瑣し、七歳にして、男と席を同じうすることなからしめ、社會と觸接せしめず、一生米を炊ぎ、衣を縫ひ、厨房にくすぼらせて、學問もせしめざりき

學問なければ、理性發達せず、宇宙の眞理なぞ〳〵大袈裟な事はさて置き、事物の是非曲直がわからざる也。文字なきもの〳〵智惠は、所謂小利口にして、一寸氣が利きて、間が抜け、さがしうして、却つて牛賣り損ふやうになる也。文字なきも、出で〳〵世間を讀まば、わけもわかりたる人となり、自から智惠も出來、分別も出來れど堂にのみおしこめられては、たゞ邪智邪慾のつのるのみ。且つ無理におしつくれば表面や一時やはその効あれど、人は多少反動なきを得ず。故に猫をかぶるやうになる也、すねるやうになる也、ひがむやうになる也、邪推するやうになる也、抑裁がゆるめば、横着になる也、じだらくになる也、智淺ければ、むちや也、むね狹ければ、しつこく也、融通きかず。理性明かならざれば、無分別也、情ありて、意志なければ、軟弱也。

養ひがたしとは、斯る點に存す。而して、これ女子が先天的に有するもの乎。抑も社會がかくならしめたるも乎。

女子と旅行

達磨は面壁九年、足がくさりて無くなれりとかや。日本の女子は、室内におしこめられしこと一千年、それでもなほ足のあるこそ不思議なれ。新婚すれば、婦の住ひ新室をつくれり。故に御新造樣也。家の奥ふかくとぢこもれり。故に奥樣也。老いては、更にひつこめり。故に御隱居樣也。たま〳〵出で〳〵山にのぼらむとするも女人堂ありて、遮られたり。富士山にのぼりしもの、日光に遊びしものなどは、必ずや女人堂の痕跡を見しなるべし女人堂とは、山に詣づる女が、こゝにて禮拜をすまし、それより上に登ることを禁ぜられたるが爲めに立てられたるもの也。これを足弱き女の事ゆゑ、山下までくれば十分思が屆きたる也。御苦勞に山上まで上るを要せずと、坊主が情をかけてくれたるものと思はば、とんでもなき間違也。實は女は罪ふかきもの、汚れたるものとして、輕蔑して上るを許さゞりし也。男とても、

幾日か垢離とりて、はじめて上るを許されし也。もし維新以前、女子にして、日光に遊ぶものありとせむか、東照宮は見ることを得ず、裏見、霧降の如き下らぬ瀑は見ることを得む。されど、天下の大瀑なる華嚴瀧は見るを得ざりし也。劍が峰の紅葉は見るを得ざりし也。華嚴につゐで日光中の大瀑なる湯瀧、龍頭瀑は見るを得ざりし也。幽趣この上もなき山中の湖の中禪寺湖は見るを得ざりし也。湯本温泉に浴するを得ざりし也。

明治の世になりて、女人堂はこぼたれたり。されど依然として、女の高山に上るものなし。唯西洋婦人のみは、先んじて到る處の高山に足跡を印せり。何ぞ西洋婦人の元氣にして、日本婦人の意氣地なきや。

日本の女子にして、明治の新社會に仲間入りせむとせば、先づ歩行することよりはじめざるべからず。歩行し得るならば、旅行して、自然の美に接せよ。必ずや卿等の氣宇を宏濶にせむ、卿等の趣味を高尚にせむ、卿等の精神を皷舞せむ、卿等の塵慮瑣念を一掃せむ、知識をもひろめむ、役者のうはさ、衣服の品評、姑の讒訴以外に、多くの話柄を得む。

芝居をねだり、三井の呉服をねだる、妻君ありて、旅行をねだる妻君なき間は、日本の女子は、社會以外に敬して遠ざけられても、仕方なしと思はざるべからず。

野宿

余は勸む、青年の士、閑あらば、旅行せよ。旅行するならば、時々野宿もせよ。暫らく、余の實驗を語らしめよ。余は、濱邊に野宿したることもありき。稻田の中に野宿したることもありき。桑畑の中に野宿したることもありき。山中の堀立小屋に席を蒲團として眠りたることもありき。神樂堂の上に眠りたることもありき。眠りながら歩きたることもありき。これ必ずしも自から好んで爲したるに非ず。或は錢なくして、止むを得ざるに由り、或は錢あるも、旅店なきに由りたり。その時

には、苦しく思はざるにわらざりしも、野宿に慣れて見れば、疊の上に臥すること、が、非常に快し。敷蒲團なくとも、さまで窮屈には思はざる也。これが、大厦高樓の上、絹蒲團にのみくるまつて臥せし人ならば、田舍のむさくるしき旅店に宿ること、既に氣味惡かるべし。かたくして、薄くして、而かも垢つきたる木綿の蒲團に臥すること、益々苦痛なるべし。況んや敷くにも、被ふにも、蒲團なき眞の野宿に於てをや。かゝる人が、若し戰爭にでも出なば、如何にか苦しかるべき。旅行するも苦しかるべし、高山にのぼらむことは、益々苦しかるべし。

生れてより死ぬるまで、大厦高樓の錦被の中に臥し得らるゝ人の世ならば、野宿の經驗なくともよかるべけれど、そは、萬人中の一二人に期すべき所也。よしや、之を爲しうるとするも、慣れて見れは、よそ目に見るほどに、うれしきものに非ず野宿に慣るれば、野宿のさまで苦しからざるが如く、錦被に慣れては、錦被もさまでうれしからざるべし。されど、野宿になれたるものが、一朝錦被に臥すれば、その心地よきこと、いかばかりぞや。貧賤の苦を知りたるものは、一朝富みたる時の快さ大なるべく、野宿になれたるものは、疊の上に臥する時の快さ大なるべし。

野宿や木賃宿になれたるものに取りては、いかなる家も、大厦高樓也。席を蒲團とするに慣れたるものに取りては、垢のつきたる、かたき蒲團も、錦のしとね也。かくて、いづくにゆくも、安眠するを得べし。今の世の紳士、旅館などにゆきて、少し惡き部屋に通さるれば、その苦痛に堪へず、茶代を奮發して、先宿の人を追ひ出し、其室を奪ひて、自から快とするもの少なからず。何ぞ其心事の陋なるや。野宿するよりはと思へば、少しばかり惡き部屋なりとも、つゆ不快なることなく、かゝる沒道義の事はなさゞるべき也。われ曾て聞く、さる紳士、さる處の旅館にやどり絹の蒲團ではらひになりたりとて、不平をならしけるに、主婦冷やかに、御宅に居らるゝと思召して、我慢せられよと云ひければ、その紳士、頭を叩いて閉口せりとかや。すべて、衣食住に關して、不快多く、不平多きは、畢竟するに安樂に慣れたる

に由る。はだかよりは、粗服がよく、飢えるよりは、粗食がよく、野宿よりは、疊の上がよしと、あきらむれば、天下、何の處にか不快あらむや、不平あらむや。

後悔錄

一

豆屋の娘、美衣をつけたる藝者を見て、羨んで曰く、藝者になりたきもの哉。既にして、その家商賣に損して、止むを得ず、藝者となれり。さて、いよ〳〵藝者になつて見れば、思つた程に面白きものに非ず。藝者は疊の上の乞兒なり。三味線もちたる地獄也。一枚の着物もひと通りの苦辛では出來ず、歎じて曰く、早く泥をあらひ落して、堅氣の女になりたし。

その娘顏美なるにあらねど、世の中には、物好きもあるものにて、一商人、之をうけ出して、妻とせり。その商人、金のまはり少しよかりしは、放蕩し居りし間にて、藝者をうけ出す頃は、はや左前也。貧乏世帶ひきうけて、金の指輪もゆるくなれり。その指輪も、やがて質屋の庫にとびゆけり。衣服もなくなれり。止むを得ずまた藝者になれり。夫はなはつきまとへり。もとの藝者時代よりは、荷が重くなりて、今は我身を養ふの外、意氣地なき夫をも養はざるべからず。歎じて曰く、女房もいやなり、藝者もいやなり、もとの豆屋の娘になりたし。

二

家とめるにあらねど、貧しからず、殊に女の子はわれひとりなれば、蝶よ花よと愛せられ、何をしても叱られた事なく、ねだることは、すべて聞かれ、學問をよそに藝能をよそに、したい放題な事して、二十年をおもしろ可笑しく過せり。喜んで曰く、難有き父よ、母よ。

いよ〳〵人に嫁して見れば、我身に、これ一つ取柄なし。禮義を知らず、作法を知らず、琴はならひたれど、人の前に歌ひ彈くほどにはなり居らず。着物を縫ふて

とを知らねば、料理もろくに出來ず。夫に代筆をせまられて、見るもうらめしきは蚯蚓の、のたくりたるやうなる我が水莖の跡、夫に對し、姑に對し、人に對して、穴にも入りたき心地す。歎息して曰く、うらめしき父よ、母よ。

三

豪農の娘、澁皮のむけた顏付にて、學校の成蹟も、常に優等也。親には自慢の種となり、先生にはめられ、一村の人々にうらやましがられぬ。かくて、高等小學校を卒業せり。村の若者、言ひよるもの少なからざれど、みなはねつけたり。父母、婚をすゝむれども、かぶり振りぬ。最後に、さる豪農の息子の嫁にと懇望せられたれど、それも斷りぬ。以爲へらく、われの如き才色才學、むなしく草深き田舍にとざすべけむや。駿馬痴漢をのすべくもあらず。われ豈に土臭き百性風情の妻となりむやと。親に强請して、都に遊學せり。

都にのぼりて、はじめて悟りぬ、身はこれ鳥なき島の蝙蝠なりしことを。太郎作次郎作の娘どもの中にありてこそ、われは美女なりけれ、才女なりけれ。都の貴嬢たちの中に伍しては、物の數ならずと、いたく落膽せり。さればとて、今更すゞ〻田舍にかへるも殘念なりとて、うか〳〵と學ぶ程に、たのもしげなる學生あり。口もうまし、樣子も立派也、學問も出來さう也、智惠もありげ也、以爲へらく、かゝる人こそ、將來勢力ある紳士となるべけれ。われもかゝる人の妻とならば、ゆく〳〵は、交際場裏の女王となるを得むと。遂にちぎりかはしぬ。

さて、慣れあひて見れは、學問も智惠もなき人なりけり。女の前に口がうまきのみにて、物の役にたちさうにもなし。たゞ好むは、酒と女、長ずるは、小唄うたふことばかり。有望の人士とは思ひの外ののらくら者也。しくじりたりと、後悔するほどに、その男も我をすて〻去れり。故郷にかへるも、面目なし。如何はせむと、困り居たるに、親迎ひに來りぬ。かくて、無事に故郷に歸りは歸りたるもの〻、生意氣娘のはてを見よとて、人に後指さゝるゝとの苦しや。われを所望したりし豪農

の息子は既に妻を迎へたり、郷黨の評判よく、縣會議員にまで選擧せられたり。わゝ、くやしや。

衞生上の美人

きめあらく、色くろく、顏はひらべつたく、腰は大道臼の如くふとき女、或はお氣に入らぬかも知れず候へども、これ實に衞生上の美人と申すものに候。きめこまかく、首ながく、肩そげ、色白く、體すらりとしたるは、見ては美に候へども、これは肺病の特徴の由に候。世の幸福の源は、まづ身體の健康に候。身體の壯健なるうちは、慣れて何とも思はざるべけれども、重き病氣にかゝつて御覽候へ。何を見ても面白からず、何を食つてもうまからず、體はいたむし、氣はふさぐし、苦しい思をして、それで金がかゝつて、これほど馬鹿々々しきものは無之候。殊に細君の病めるは、まるで火の消えたやうにて、家庭の幸福の大半はなくなり申候。申すまでも無之候へども、細君は、床の間の置物にはあらず、唯その形のみを見るべきものにあらず候。必ずく色にのみ迷ひ給ふと莫れ。顏は二の町なりとも、體の壯健なる女を御擇びなさるべく候。

男をもつて痩せたいぞとは、近松の院本の文句にて、女子の情をのべたるものに候ふが、今に日本の女子はこの考を持ち居るとぞ、なげかはしく候へ。痩せたいたいと申す女は有之候へども、肥りたいくと申す女は、一人も無之、誰も肥り居ることを恥るやうに候ふが、これ甚だ以てわけの分らぬことに候。足利義氏とか申す人は、無類の勇力あるものにて、無類の醜婦、おつといや、無類の衞生上の美人なる板額をば、自から乞うて妻となしたる由、そのわけは、斯る衞生上の美人を妻として非凡なる勇士を生みたしとの事に候。これは尤も至極なる心掛と存候。生としし生けるものゝ第一の役目は、子を生むことに候。それも弱き子うみては、十分に役目をはたしたるものとは申されず候。女も痩せたいなぞゝいふ不了簡を起さずに、

ふとりて、大に壯健にならむとするが、女の第一のつとめに候。家にのみ坐つて居らずと、大に運動すべく候。體育が、女子教育中の最も重きものに候。海水浴にゆけば、色が黑くなるから、いや、などゝ云ふべからず候。世のわからず屋におてんばと云はれても、かまふことなし、自轉車にのるもよろしく候。

容貌談

君子は聖德ありて、容貌愚なるが如しとは、恐らくは、老子が、孔子を馬鹿にしたる言なるべし。概して、人物の如何は容貌にあらはるゝもの也。教育あり、修養ある人の容貌は、どこかしまりたる所あり。しからざるものは、どこか間が抜けたるもの也。目口の大小配合の如何は、生れつきにて、いたしかたなし。生れ付は不格好にても、智惠ある人ならば、容貌も自から氣がきゝて、こゝろよく見ゆ。器量のよしあしと、品位のあるなしとは、自から別也。目の活動や、唇の活動や、首全體の活動や、手の活動や、體のこなしや、實に人品に關し、愛嬌に關し、器量にも關係す。如何に美衣をつけたりとて、着こなしが惡ければ、幾んど人形と異ならず顏ばかり美なりとも、體のこなし惡ければ、見おとりがするもの也。

余輩は、必ずしも美衣をまとへよ、白粉をつけよ、おしやれをせよと勸むるものに非ず。たゞ男も女も、それ相當の禮容あらむことを望むもの也。人に媚ぶるを要せざれども、人をして惡感情を起さしめざるやうにしたきもの也。男の事は、暫く措きて、女の容儀に就いて一言せむ。

顏容の如何、髮の色、髮の多少などによりて、髮の結び方を變ぜざるべからず。島田は、あだつぽし、十七八までに結ふべし。二十歳以上は不可也。束髮ぶざまなものなれど、細面にて色白き女には似合ふものなり。さればとて、顏丸くして愛嬌ある女にも似合ふことあり。色黑くして、美人に緣遠き女は、ねんを入れた島田よりも、ひさなりの束髮が目にたゝずして、却つてよき事あり。概して束髮は、平服

か海老茶袴に似合ふものにて、紋付の禮服には、不似合也。

おしろいの香はよきものなれど、むしろつけぬがよし。つくるも、こて〳〵と塗るべからず。赤黑き顏に白粉つけたるは、化物のやうにて、却つて醜也。顏のぶざまな女、色の黑き女は、白粉つけぬを可とす。

禮服つけたる時には、おくれ毛一つもさがらぬがよけれど、普通は、おくれ毛のさがれるが、却つて風性あるもの也。目に目やにのつき居らぬやう必ず注意すべし歯はきれいにみがくべし。歯くそのつかぬやうにすべし。口の臭からぬやうにすべし。歯に物のはさまり居るは、人の氣持を惡くするものなれば、注意して物のはさまらぬやうにせざるべからず。

からだ全體の活動、優雅にして活氣ありたき者也。からだのこなしよきことは、貴婦人の一要素也、否、美女の一要素也。茶の湯を習ふか、女禮式を習ふか、踊を習ふかすれば、自然にこなしがよくなるものなれども、少し注意して熟練すれば、ひ

と通りのこなしは、出來得るもの也。着こなしといふことは、わけがなさゝうで、馬鹿にはならぬもの也。こは體格の如何に關し、裁縫の如何にも關すれども、また着る人の注意如何に關す。着こなし惡ければ、折角美衣をまとふも、狼がころも着たるごとくなるべし。

話しする場合にも、唇ばかりを動かさずに、目の活動、手の活動をよくすべし。首の活動もよくせざるべからず。生き〳〵するやうにありたきものなり。

お山役者、腰以上は女になり得るもの多けれども、腰以下まで女になり得る者は稀なりとかや、歩く時の姿は、美醜に關し、品位の如何にも關す。さればとて餘り内輪踏みすぎて、あひるの歩くやうなるも、見よきものに非ずや。やさしくして活氣あるべし。

精しく說きゆけば、一部の女禮式ともなるべく、化粧法ともなるべし。要するに智惠ありて、注意ふかき女ならば、容儀も自から氣が利きて、見よきものなり。凝

て、かたくなりすぐるも不可也、すましすぐるも不可也。氣取るも不可也。されば
とて、ぼかんとするも不可也。媚態にすぐるも不可也。

女の戒十三則

◉女は迷信ふかきが常也。千駄が谷より大久保へ轉居しけるが、鬼門に當る故に惡しといふ聲、ちらほら耳に入りぬ。又家が馬の口の形をなせるが故に惡しといふ聲も聞きぬ。余云ふ、世の中に、鬼門も、馬の口の家も、あつたものに非ず、たゞこの家にて注意すべきは、二階の窓と湯殿と也。二階の窓は、てすり低ければ、或は小兒の落つるとあらむ。湯殿には、戸なくして、腰高障子なれば、或は盗賊之より入らむと。湯殿に、出刄庖丁と余の下駄とを重ねおく。曰く、これ盗賊よけのまじなひなりと。然るに、その盗賊よけのまじない、毫も効能なく、不幸にも、余の言が當りて、一夜、梁上の君子、湯殿より忍び入れり。家人みな知らず、翌朝おきて、はじめて知れり。盗まれたるは、少許の金と衣類と傘三四本と也。下駄は湯殿にあれど、出刄庖丁はなし。思ふに盗みゆきたるならぬ。又思ふに、家の中をさがしまはるうちにも、その庖丁をもち居りて、起き出でゝ爭ふものあらば、斬りつけむとせしならむか。さらば、まじなひが、却つて仇となりける也。可笑しや。

◉雨あがりの朝、小兒をつれて、牛込の方へ用たしにゆきけるに、小兒、下駄の緒をぬぢ切れり。すげなはしてやらむとて、袂をさぐるに、帛、緒の類なし。止むを得ず、紙にて、かんじんよりを撚り居たるに、往來の人すくなからず、令嬢もゆけり、貴婦人もゆけり、最後に、身のなり、いやしげなる一老婆、たちぢまりて、しきりに袂を探しけるが、終に赤き金巾の小切をさがし出して、われにくれて、かんじんよりにては、駄目なり。これにてすげよとて、立ち去れり。心やさしき人哉

◉日本の婦女は、多く煙草をのむ。よからぬ風習也。第一、煙草は、腦を害し、のゞを害す。又たゝみ、ざぶとん、着物などに、やけこがしをこしらへ易し。甚し

きは、爲めに火事を起すこともあり。貧乏人にありては、不經濟也、煙草のみつければ、煙草なくなりたる時、もしくは病氣などにて、のめぬ時、非常に苦痛を感ず。煙草のまぬに、こしたる事なし。殊に、女は。

◉女の酒のむも、惡き事也。酒のほろ醉心地は世にも快きものなれど、さむれば後悔あること多し。品行をはじめとし、まちがひの起るは、大抵酒にもとづく也。殊に家をとりしまる女房が、酒のみては、氣が大きくなりて、あれも買へ、これも買へとて、金をつかひすぐるもの也。古來、酒のみの女房ある家に、お金のたまつた例なし。酒の相手に面白き女は、概して家の爲には惡きものと心得べし。

◉酒も、煙草も、のみならはねば、飲みたくなるものに非ず。母が、うまさうに煙草のむを見て、眞似して見たくなり、こつそりのんで見た處が、さつぱり、よきものに非ず。むせんで、せきをして、却つて苦痛を感ず。されど、度かさなれば、その苦痛減じて、終にうまくなり、のまずには居られぬやうになる也、酒は、自から飲まずとも、酒事のある時、無理に強ひられ、目をつぶつて、ぐつとのみ下し、あゝ苦しや、こんなものが、何處が、うまくて、のむ者ぞと思ふこと、たびかさなれば、ふしぎや、苦しかりし酒がうまくなる也。斯く酒も、煙草も人生れながらにして、好むものに非ず。のまなければ、のまないですむもの也。

◉日本の食事、膳を別々にするは、手數もかゝれば、一家團欒の眞趣をも失ふ。よろしく食臺を設けて、親子兄弟ひとしく之を圍むやうにすべし。日本にては、食事の時は、靜肅をむねとし、しやべることをもいやがる風あり。もとより食事の時にさわぐは、よからぬど、快活に談話し、笑ひ興ずることは、一家の團欒に趣味を加ふるものにて、また衞生上にもよきことなるべし。

◉さき頃、さる名士をおとづれけるに、西洋料理を饗せり。曰く、これ妻の調理せる所也と。その調理のよきことをほめけるに、主人曰く、われこの妻あるによりて浮世の不遇も苦しく思はずと。これまことの家庭の味なるべし。

◉料理の事は、家庭第一の急也。人或は曰く、料理は一切外よりとりよせるやうにすれば、家事煩雑ならずしてよしと。それもひと月や、ふた月なら、よかるべけれど、人々は食性あり。いつもおあてがひの食物には甘ん芒ざるべし。家庭の主宰者たる細君は、何はさておき、料理の事には通じたきもの也。

◉食物は、下らぬものなれど、案外、馬鹿にはならぬもの也。夫婦、食性を同じうし、一つ鍋をつゝきあはゞ、情味一層加はるべし。夫は柔き飯を好み、妻は硬き飯を好み、夫はしつこきものを好み、妻はあつさりしたものを好みて、食性相反しては、始末がつかざるべし。されど、食物のすき嫌ひは、習慣によりて變はることあり。永く住む間には、妻の食性自から夫の食性に似より、夫の食性亦自から妻の食性に似ることなしとせず。

◉子供をあまり嚴しく叱りてもよからず、餘り甘やかすも惡し。家庭教育の要は寛嚴そのよろしきを得て、温々たる愛情こもるやうに心掛くべし。ことに注意すべきは、子を育つるものは、必ず己れの性情を抑へざるべからず。己れが腹だゝしき時は、むやみに子供をしかり、己れが悲しき時は、子供にとりあはず、己れの性情のまゝにて、子に接すれば、子は自から親を難有がる情を失ふべし。

◉婦女にまづのぞましきは、身體の強壯也。顔は十人並にて、甘んずべし。餘り美なれば、幸福をうること多けれども、また災害をうくることも多かるべし。常磐も、餘り美ならずば、二夫に事ふるの耻辱をのこさゞりしなるべし、楊貴妃も、餘り美ならずば、安祿山の亂は起らざりしなるべし。玉の輿にのるも、美形のいたす所なれば、この世ながらの地獄におつるも、美形のいたす所也。

◉婦女の通弊は、ひがみ根性、そねみ、偏狹、小量、依賴心など也。婦女に取るべきは、注意ぶかきこと、手のつむこと、情のやさしきことなど也。これらの長所なくば婦女の、婦女たる所以はなくなるべし。

◉女、子を生めば、子をそだつることが、第一のやくめ也。よしや、裁縫など、

よそに出しても、子の爲めに、本をよんでやつたり、話をしてやつたり、よろづ子をそだて教ふることに、力をつくさゞるべからず。賢女の子は、概して賢也。これ遺傳にもよれど、大半は母の教育による也。

女子雜觀十則

◉子を生み、子を育つることは、當に人間のつとめなるのみならず、あらゆる生物を通じての義務也。然るに人間以下の動物にありては、教育なければ、育つることが易く、從つて親としての義務を果さゞるものなし。人間にありては、教育を要することなれば、子を育つることむづかしく、從つて十分に親としての義務をはたさゞるもの多し。母は殊に直接に育兒の道にたづさはるものなれば、何はさておきその心掛なくてはかなはず。まづ我體をつよくすること、育兒の道の第一着也。次に生計のゆるす限りは、孕める時、乳をのませつゝある時は、成るべく滋養物を食ふべし。こは第二着也。愛におぼれて子に物をくはせ過ぐべからず。あたゝかに着せすぐべからず。

◉子をそだつるに、ひとの乳あまりあるも牛乳少しづゝのませ置くことも必要なるべし。三四歳以上になれるものに、牛乳のませむとするも、嫌ひこのまざるもの多し。一朝人の乳のませることが出來なくなりたる時に不便也。生れたてより少しづゝでも飲みならはせて置けば、かゝる憂なし。また母親が用事の爲めに外出せむ時にも、牛乳のむ子ならば、牛乳あてがひ置けば、子をつれずに用たしすることも得らるべし。

◉子の年長ずれば長ずる程、母も智識を要す。必ずしも多きを望まず、せめて八九歳前後の小兒の質問に馬鹿げたる答をなさゞらむまでの學識ありたきもの也。

◉御褒美にて、小兒を釣りて、用をさせることは、考へ物也。かくて自然に報酬の念つよくなりて、報酬なき仕事には、精出さゞるやうになるべし。

◉小兒の泣をとゞむるに、恐しきものをかりておどかすも、考へ物也。たとへば鬼が來るぞ、幽靈がくるぞなどいふの類は、自から小兒の心をひがむやうにすべし

◉日本の女子が、西洋の女子に比して、愚をかぶり過ぎ、うはべにおとなし過ぎ愛想なく、趣味なく、快濶、無邪氣、天眞爛熳のおもむきを缺くは、女子にも罪なしとせざれども、實は社會の教へ成せる所也。日本にては、女子をむやみにおとなしくするやうな教育を施し來れり。男女七歳にして席を同じうせずとは、古來のをしへ也。かくて女子はよろづ束縛せられ、笑ひたきも笑はれず、物言ひたきも言はれず、自から愛想なく、趣味なきやうにならざるを得ざる也。もし處女が、年若き男に愛想ふりまきて見よ、忽ちよからぬうはさをたてられむ。細君が他の男になれ〳〵しくして見よ、忽ち浮名をながさむ。社會が斯くわけがわからず偏狹にすぐるを以て、女子自然にちゞまりて、天眞爛熳の趣あるを得ざる也。これをこれ察せずして、女子のみを咎むるは、思はざるも亦甚しとむふべし。

◉女子の特長は、よろづの事に周密なるにあり、丁寧なるにあり、よく小智惠のきくにあり、情のやさしきにあり。女子はよろしくこの特長を以て、社會に男子と對立せむことを求むべき也。文學や、繪畫や、もと女性的也。故に文學繪畫に長せる女子、古來その人に乏しからず。而かも折角この道に才能を有するも、人に嫁すれば、中絶して、更に進歩せざるが常也。思ふに、一家を整理する細君の道と、藝術とは、相容れざる也。特別の藝能ある女子には、細君以外の境遇を付與すべし。必ずしも繩墨を以て律すべからず。

◉古の清少納言は家婦として、ちと困りものなるべし。されど、文人としては、最も面白き性格を有せり。古來著書多けれども、清少納言の枕草子ばかり思ひ切つて筆を揮ひたるものは、男子の作にも之を見ず。清少納言は、學深く、識ひろく、才敏に、氣鋭也。眼中人なし。而して文才に長じ、かねて觀察奇警にして詩趣に富めり、その筆人を罵りて骨を刺し、詩趣を看取して、才情流露す、讀み去り、讀み

來りて、痛快なると言はむ方なし。われ清少納言の人となりを愛し、殊にその文章を愛す。されど、これ文人として取る也。家婦として取るに非ず。

◉清少納言や紫式部や、これ千載はじめて見るの天才也。かゝる人は生るゝ也。作らるべくもあらず。まして之を學ぶべからず。女子にして、少し文才あるもの、うぬぼれの鼻を高うして、直に清少納言紫式部を以て自から任ずれば、とんでもない間違を生ずべし。かゝる天才は一代に一人いづるも、既に十分也。幾百千の清少納言紫式部が、一時に輩出しては、たまつたものにあらず。況んや清少納言紫式部の出來損に於てをや。

◉われは日本の女子としては、最も靜御前を愛す。吉野雪中、夫義經と別れたるは、千古餘韻ある事情也。堀河館に於けるをゝしき擧動、鶴岡祠に於けるけなげなるしわざ、才色絶世、歌舞人にすぐれ、智あり、勇氣ありて、而かも情にあつし。されど義經もし順境に處したらば、靜は恐らくは、かゝる名は殘さゞりしならむ。

世には名なくして沒する偉人才女多かるべし。

女子と日本の家庭

日本の家屋は、すわるやうに出來居れり。その影響する所すくなからず。日本の衣服は座るに適し、歩くに適せず。日本人の體格も、座るにつれて、脚短く胴長き畸形を呈せり。女は洋服着ても、目にたゝねど、男が洋服きれば、脚短くして、格好太だ惡し。胴の長さは、外國人と異ならねど、脚短き故に、身長低くして、小人島の觀なしとせず。明治の世になりて、學校、役所、會社など、椅子を用ゐるやうになりて、脚も幾分か延びたるやう也。父親と息子とつれだつて歩くを見れば、概して息子が高く、母親と娘とつれだつて、歩くを見れば、概して娘が高し。いづくにても、女よりは男が高く大なるが常也。されど、西洋の男女は、身長の差甚しからねど、日本の男女は、其差甚し、女の髷男の肩にまでも及ばざる夫婦あるは、め

ずらしからず。これ男は外出することにある時、膝をくむこと多けれども、女もし横膝すれば、忽ち母親にねめられて、常に跪座せざるを得ざれば也。されば、日本の男ひくけれども、日本の女は、なほその低き男とも釣合が取れざるまでに低き也。起居擧動も、亦座る家屋、座る衣服につれて、非常に制限せらる。女子殊に甚し。人もわれも立つてのみ居れば、腰より以下の擧動は、目にたゝぬものなれども、座つて眺め、寢轉んで眺むるやうに出來たる日本の家屋の構造にては、腰以下の擧動が大事也。男の子だから亂暴でもよしと親が許してくれれど、女の子で見れば、許してはくれず、手の指の先から、足の先に至るまで、しとやかに、やさしく、更に進んで小笠原式にしつけらるゝ也。この點に於ては、洋服着たる西洋婦人こそ氣樂なれ。肩胸のあたりが、豊かにふつくらとして居れば、それで格好がとゝのふ也。腰以下には、毫も配慮を要せず。日本にても、男の服には、上に羽織あり、下に袴ありて、身體の形をあらはさゞれども、女の服は、たゞ帶が太なる腰をかくしてくれるのみにて、下に袴なく、禮服となれば上に羽織も着られず、夏はことさら薄き絽の單衣、肌の色をであらはすものなれば、身躰中、到る處に氣を配らざるを得ず。餘り氣をくばり過ぎる故、却つて顏の方がお留守になる也。日本人は西洋人に比して、人種が劣等なれば、いたし方もなけれど、西洋人の顏のひさ〳〵したるこそ、見ても氣持よきものなれ。單に顏の外面によりて、動物に優劣をつけむには、表情の有無多少を以て判せざるべからず最下等動物には、顏なし。やゝ進めば、顏あり。されど、表情なし。犬猫の如きに至れば、少し表情あり。今少し進んで猿、獅々などになれば、大に表情あり。なほ一段進んで、人となれば、更に一層表情あり。人の中にても、人種によりて表情の多少あり。西洋人の顏、最も表情に富めり。日本人の顏は、其表情西洋人の顏よりはむしろ猿の顏に近し。同じ日本人の中にても、馬鹿な人よりも、利口な人が表情に富み、學者文人よりも、政治家が表情に富み、貴婦人よりも、藝者が表情（但し

下品なる）に富む、尤も優劣は表情の點のみにては判せられず。表情少なき貴婦人が劣等にして、表情多き藝者が優等なりとは云ふべからざる也。殊に日本にては、のッペリとして表情なきを上品とするならはしなりければ、お公家様よりは、店屋の番頭の方が表情あるやうになれり。女はなほ更つんと澄ますを高尚としたれば、表情の發達せざるもことわり也。澄まさば、まだしも、女はあまり顔を見せぬ方針を取れり。嬌羞を帶ぶる娘時代はなほ更也。人にあへば、うつむきがちにて、口よりも頭のかんざしに物言はす。否、情を表す。そのかんざしの大にふるふは、笑ふ也。その時は、顔を袖に埋む。少しふるふは、笑微する也。動くとしもなくして、微にゆらぐは、切なき思あるにや。かく少女は顔より髪を見するをならはしとすれば、髪の結ひ方を氣にして、顔の表情に注意せず、表情も發達せず。さは云へ、表情は必ずしも下品なるものにあらず。客に媚を呈せむとする藝者の表情こそ下品になりたれ、高尚快活なる情を表する顔肉の活動なしとせむや。吾人は、日本の婦人に向ひて、髮の結ひ方よりも、腰以下のふるまひよりも、顔の表情は意をそゝぎて、冷かにすまさず、さればとて、媚態を呈せず、優雅にして、爽快にして、生動せむことを勸むる者也。

かく家屋の構造に制せられて、日本の女子は、腰以下に意を注ぐこと多ければ、男には一寸眞似が出來がたし。女形の役者、腰以上は女になれるも、腰以下まで女になり得るものは稀なりと聞く。胴のかじむもの多きも、亦家屋につれて起れる也。啻に見てみぐるしきのみならず、健康上にも害あり。殊に身長の高き女に、胴のかゞめるもの多し。ひよろ〳〵とひよろ長きは、格好よきものにあらねど、すらりと高きは美形なるに、日本の女は、身長の高きをいやがるが故に、かくかゞめる也。馬鹿げたる次第といふべし。

女子が家の内にばかり居て、座つたり、起つたり、歩いたりするのみの世ならば頭より足のさきまで、小笠原流にしこまれて優美の觀を呈すべけれど、外出せざる

下品なる）に富む、尤も優劣は表情の點のみにては判せられず。表情少なき貴婦人が劣等にして、表情多き藝者が優等なりとは云ふべからざる也。殊に日本にては、のッペリとして表情なきを上品とするならはしなりければ、お公家様よりは、店屋の番頭の方が表情あるやうになれり。女はなほ更つんと澄ますを高尚としたれば、表情の發達せざるもことわり也。澄ますさば、まだしも、女はあまり顔を見せぬ方針を取れり。嬌羞を帶ぶる娘時代はなほ更也。人にあへば、うつむきがちにて、口よりも頭のかんざしに物言はす。否、情を表す。そのかんざしの大にふるふは、笑ふ也。その時は、顔を袖に埋む。少しふるふは、笑微する也。動くとしもなくして、微にゆらぐは、切なき思あるにや。かく少女は顔より髪を見するをならはしとすれば、髪の結ひ方を氣にして、顔の表情に注意せず、表情も發達せず。さは云へ、表情は必ずしも下品なるものにあらず。客に婿を呈せむとする藝者の表情こそ下品になりたれ、高尚快活なる情を表する顔肉の活動なしとせむや。吾人は、日本の婦人に向ひて、髪の結ひ方よりも、腰以下のふるまひよりも、顔の表情は意をそゝぎて、冷かにすまさず、さればとて、媚態を呈せず、優雅にして、爽快にして、生動せむことを勸むる者也。

かく家屋の構造に制せられて、日本の女子は、腰以下に意を注ぐこと多ければ、男には一寸眞似が出來がたし。女形の役者、腰以上は女になれるも、腰以下まで女になり得るものは稀なりと聞く。胴のかじむもの多きも、亦家屋につれて起れる也。啻に見てみぐるしきのみならず、健康上にも害あり。殊に身長の高き女に、胴のかゞめるもの多し。ひよろ〳〵とひよろ長きは、格好よきものにあらねど、すらりと高きは美形なるに、日本の女は、身長の高きをいやがるが故に、かくかゞめる也。馬鹿げたる次第といふべし。

女子が家の内にばかり居て、座つたり、起つたり、歩いたりするのみの世ならば頭より足のさきまで、小笠原流にしこまれて優美の觀を呈すべけれど、外出せざる

を得ざる時勢となりては、木から落ちたる猿たるを免れず。さらでだに身長の低き日本の女子が、胴をかゞめて、内輪ふみて小股に刻みゆくさまは、一種のボンチ繪也、座る時世には、座る樣式ありき。歩く時勢には、歩く樣式なかるべからず。女學生が、靴はきて、海老茶袴はきて、元氣に歩みゆくは、今日の時勢に適應せる樣式也、これを室内に應用しても差支なし。かくては、粗野也、女子の美を害すとて非難する頑冥者流あるべけれども、習慣となつて仕舞へば、それで目にたゝぬもの也。更に繰りかへさしめよ、日本の女子が腰以下にむけし下らぬ注意を、顔面に集沖して、表情の美を發揮せざるべからず。

女子の着物につきて

余は、今の女子の服制を美とするもの也。帶の前後よく、ふりもよく、裾が風に少しまくれて、雪の脚がほの見ゆるなど、殊に美也。唯、注意したきは、しやつ、づぼんしたの類は、一切用ゐぬやうにしたきもの也。男もさしたきものなれど、男は、出勤する際は、洋服をきるが常なれば、洋服と共に、しやつとづぼんしたとをはづせば、忽ち風をひくことあるべし。女が、しやつ、づぼんしたを用ゐるは、常に美を缺くのみならず、衛生上にもよろしからず。腕や、脚や、胸のあたりやは、風が通るやうにしてなければ、寒さに堪ふる習慣をつくるもの也。女は兒に乳をのますものなるに、たびゝ胸をあけるものなれば、胸の皮膚よわきものは、風をひき易し。而して、平生しやつを着居れば、乳をのます際に、風をひくの恐あれば、平生胸をつゝゑずに置けば、皮膚つよくなりて、風に當るも、容易に風をひかざるべし。

運動會

運動會は、一種の見せ物也、興行物也、觀者の慰みもの也。されど、運動會を一

種の見せ物とすれば、學者の著述するも、政治家が政治界に運動するも、軍人が戰爭するも、いづれか一種の見せ物ならざる。

多くの運動は、一種の技術也。鬼事、佛蘭西鬼、綱引などは、誰れにも出來ることにて、從つて趣味なし。競走や、高飛や、棒飛や、器械體操や、ベースボールや柔術や、擊劍や、弓や、これらは、誰れにも巧に出來るものに非ず。その技愈々難くして、其巧、いよ〳〵趣味ある、難技に巧にする處に、觀者も趣味を感じ。競技力も其力を試み得て、愉快を感ず。これ運動の本意也。徒に兒女の喝采を博して得々たり、賞品を得て愔々たるは、未だ運動を解したるものと云ふべからず。

稠人の中にて技を競ふは、これ必ずして虛榮心に基づくものと云ふべからず。稠人の中なれば、張合あるが、人の常情也。常者が演說するにしても、少數の愚夫愚婦の前にては、氣が入らざれども、多數の天下の識者の前にてすれば、自から氣が入りて、演說がひときは巧に出來るもの也。運動も、亦然り。晴れの舞臺といふことは、何事にも氣を入るゝに必要なること也。之を虛榮心の致す所と解するは、運動を解せざるのみならず、かねて人を解せざるもの也。

近頃、早稻田の野球隊、米國に赴けり。區々たる野球に勝たうが、負けやうが、もとより名譽問題に非ず。たゞ本元にゆきて技巧を爭ふは、晴れの舞臺に出づる也平常の競技よりも一層氣が入りて、技一層巧みなるものあらむ乎。

成功の要

成功するには、幾多の要素あれども、概して、理想明かにして意志つよき人は、成功すべし、之に反して情のもろき人は、成功せざるべし。

理性明かなれば、即ち賢明也。不正直なる事をなさず、馬鹿正直なる事をなさず間抜けたる事をなさず、不義不正なる事をなさず、常識に富みて、わけが分りて居りて、思慮ありて、よく結果を豫知す。

されど、此上にも意志つよからずんば、たゞ一身をよくして、過失なきを得べけれども、社會に活動せむには、細柳の風に向ふが如くなるべし。意志つよければ、大膽也、果斷也、妄りに情實に拘泥せず、障害に凹まず、艱難に屈せずして、よく其志を貫く。

即ち、成功の要は、智を磨き、意志を練るの二事に歸すべし。その中にて、いづれが重きかと云へば、むしろ後者也。理性は少し明かならずとも、意志だにつよからば、大抵の事には成功すべし、凡そ、事は思つた通りに、たやすく成就するものに非ず。賴みにしたる人が裏切りをするともあれば、恩を讐でかへす人もあり、入るべき筈の金入らぬとあり、不慮の災難あり、思ひもかけぬ失敗もあり、前途を塞めば、雲漠々たり、暴風虐雨、そゞろに人の膽を寒からしむ。氣の弱きものは、おぢ氣がつきて、進取する勇氣なくなり、九仞の功、一簣に缺くこと多かるべし。大成功の前には幾多の小失敗あることを、忘るべからず。小なる失敗によわり、小なる耻辱を忍ぶ能はざるものは、到底大に成功する能はざる也。あまり理性明かなれば、前途の障害が見えて、知らず〳〵引込み思案になり、世上の事業を馬鹿らしく思ふやうになりて世の舞臺に上るよりは、高見の見物を好むやうになるべし。賴朝にても尊氏にても、家康にても、其志をなし遂げたる人は、必ず意志つよき人也。藤房の如きは、賢明なれども、惜むらくは、意志弱し。早く遁世して、一身をよとせり意志のつよからざるは、即ち情のもろき也。情のもろきは、即ち意志のよわき也。情もろければ、堅忍不拔の志なくして、苟安を貪ることあるべく、懶惰になることもあるべく、情實の外に卓立する能はざるべく、小仁に拘泥して大に仁なる能はざるべく、女々しくなるべく、勇氣なくなるべく、幸に理性明かにして、よく理非利害を判知するも、斷行して、正路に就く能はざるべし、濫褸百出し、砥綻到る處に生ず。到底成功すべくもあらず。理性明からざるも、斷行する勇氣を缺くこと多し。況して理性明かならざる上に、情もろければ、愚物也、意氣地なし也。物の役に立

つべくもあらず。

藝術の方面には、理性の人よりも、意志の人よりも、むしろ感情の人が適切なるが如し。されど、それも程度のあること也。元來藝術は、感情に訴ふるものにて、藝術家たらむものは、感情の人ならざるべからず。理性と意志との人にては不可也。然れども、餘り情もろきものは、一寸ばかり成功することあれども、大成する能はず感情を強くせむには、意志の加はるを要す。感情のみにて、意志のよわき人は、到底藝術家として偉大なる能はざるべし。感情の主要なる事業にても、意志の力を要すること此の如し。まして世上の大部分の事業には、感情はむしろ禁物也。盛に活動して、大に事業をなさむとするものは、意志の人ならざるべかず。

大成の域

龜の甲よりは、年の効といへど、藝能の如何にも由ることなり。即ち肉躰上の藝能は年は却つて害となるものあり。角力の如き、腕力に待つもの、殊に然り。怪力一世に敵なき常陸山も、數年の間には、或は駒ケ嶽、太刀山の輩にも劣るに至らむ之に反して精神上の藝能に至りて、はじめて年の効を見る。主觀詩人は、却つて青年の情熱もゆる時に、佳作あるべけれど、客觀詩人は、中老以後に於て、はじめて圓熟すべし。小説家も四五十歳以後にいたりて、圓熟の域に入るべく、評論家も四五十歳以後にいたりて、見、穩當なるべく、文章もまた大成す。

明治の世、何ぞ四五十歳以上の文士少なくして、三十歳内外、更に下りて、二十歳代の文士多きや。一葉、子規、樗牛、紅葉、綠雨など、絶代の才人、いづれも最も長じたるも、四十歳に達せずして逝けり。四五十歳以上にして、圓熟大成すべきものなるに、彼等は、その域に達せず、天賦の能力を伸ばす能はずして死せる也。人或は曰く、紅葉、綠雨は、想泉枯れ、精力つきたる也、長生すとも、さまでの事はなかるべしと。こは餘りに人を見くびりたる言也。何事もひと通りの域に達すれ

ば、進歩は一時停止するも、こん氣さへあれは、またそろ〳〵進歩するもの也。紅緑二家にして、病なくして、五十以上までも生存すれば、如何に進歩するかも知るべからず。他の點はしばらく措くも、この二家は、明治の文壇、最も文才あり、又最も文章に苦心したる人也。その文章だけにても、更に一層老熟すれば、二家の文更に一層美を加へしなるべし。四十歳未滿の文章家にては、これ文章家として漸く六七合目に達したる年輩也。頂上に達せむにはなほ、少くとも十年を要すべき也。

古人の作を玩味するものは、その作者の年齡と健否如何とを知れば、一層の興味あるべし。長き年月の間には、中休みあるも可也。一時は人に想泉つきたり、精力つきたりと言はるべけれど、棺を蓋うて見れば、何等の妨もなし。つまり病なくして、長生して、あくまでも研究的態度を失はざるものが、永遠の勝利を得べし。古來大成したる文人の大多數は、必ずや長生したる人也。健康の如何は、啻にその人の幸福に關するのみならず、文壇の盛衰にも關す。胃をやみてはじめて胃の存在を知るとかや、難病にかゝりてはじめて、健康の必要を知るも、既におそし。吾人は子規、樗牛、紅葉、緑雨諸家の早世を見て、感ことに深し。記して青年の秀才を戒む。

職業と性質

軍人たらむと欲する乎。胸に勳章つけて、洋劍がちやつかして歩くのみが軍人に非ず。軍人たらむと欲するものは、規則正しからざるべからず。服從の美德を解せざるべからず。何事も確實になさゞるべからず。質素ならざるべからず。果斷ならざるべからず。敏活ならざるべからず。勇氣なかるべからざるは言ふまでも無きと也。

醫師たらむと欲する乎。醫師は、人の命を支配する職業なれば、修業に修業をつみ、大事に大事を取りて從事せざるべからず。免許狀も取れぬ修業にて、醫師とな

らむとするは、これ社會の罪人也。病氣を正しく診斷し醫藥の功を奏することを、唯一の快樂とせざるべからず。患者の身分貧富の如何によりて、醫者の想理迚り療養せしむるに由なきこともあるべく開業醫は、醫術の外、多少の世才なかるべからず。醫は仁術といふことを解し、診察料の多少によりて、診察を異にするやうに、さもしき心を有すべからず。沈着ならざるべからず。膽氣なかるべからず。本職以外に、娯樂なきがよし。よしや、一二の娯樂ありとも、之に耽りて、本職を留守にするやうなことあるべからず。所謂醫者の不養生は、よくない事也。

教育家たらむと欲する乎。月給を得るために、器械的に智識をさづくるのみが教育家に非ず。孟子も天下の至樂としたりけむ、人材を作ることを、唯一の快樂とせざるべからず。浮世の虛名虛榮を追ふべからず。利欲をはなれて、本氣にならざるべからず。誠實ならざるべからず。教育の恩を賣るべかず。口さきにて人を教ふるのみにては不可也、直に身を以て、人を化するの覺悟なかるべからず。清貧に甘んずるの覺悟なかるべからず。身の行を修むると能はざるやうにては、到底眞に人を教化すること能はざるべし。

商人とならむと欲する乎。慾ふかくして、金を得るにぬかりなきは、商人の商人たる所以なれども、ごまかしをなすべからず。不正手段を取るべからず。馬鹿正直は非なれども、ちよこ才を逞しうして、道にはづれたることをなすべからず。儉素ならざるべからず。目先がきゝて、機を見るに敏ならざるべからず。度胸あり、辛抱づよくして、失敗に屈すべからず。約を違ふべからず。ひろく信用をうるやうに、確實なる人物ならざるべからず。眼前の小利を追ふべからず。在來の所謂町人根性は眞の商人の事に非ず。

文人、詩人、畫工など、所謂藝術家とならむと欲する乎。藝術家たるものは、先づ神經の敏なるを要す。普通の人の感ぜぬことをも感じ、氣の付かぬことにも氣がつき觀察精緻にして奇拔ならでは、到着藝術の妙を捉ふること能はざるべし。豪放に過ぎ

て、無頓着なる人は、藝術家としては、先天的に資格なきもの也、神經は過敏なるべけれど、心配性にては不可也。心配性にては、よろづの事に心配しすぎて、胸中閑日月なく、悠々として藝術の園に遊優するの餘裕なくなるべし。のん氣なる所ありて、俗人には馬鹿げて見ゆるぐらゐがよき也。藝術は、もと情に訴ふるものなれは、藝術家が情の人ならざるべからざるは、今更言ふまでもなし。人を泣かさむとせば、己れ先づ泣かざるべからず。人を笑はさむとすれば、己れ先づ笑はざるべからず、胸の冷かなるものも、亦先天的に藝術家の資格なきもの也。まして世才が有りすぎ、常識に富み過ぎては、益々不可也。藝術家として大成せむには、藝術的良心なるべからず。たゞ金の多きを貪り、塲當り俗受の爲めに媚ぶるやうな人は、藝術の神聖をけがす者也。

政治家たらむと欲する乎。餘り君子的に過ぎては不可也。政治は、世俗を對手にする商賣なれば、表面はひと通り世俗的なるがよし。人中に出しやばるが好きにて世話ずきにて、はねまはることが好きなるべし、識才あるべし、辯才もあるべし、意志つよくして、一寸見ればずう〳〵しく態度ありて可也。殊に何處となく、人をひきつける力に富まざるべからず。學問あるのみにては不可也、見識あるのみにても不可也、經綸策あるのみにても不可也。政治家は、人を相手とせざるべからず。從つて人を操縱する力にとまざるべからず。世の所謂小才子は、必ずしも政治家たるに適せず。

學者たらむと欲する乎。政治家とは、多くの點に於て、相反するを要す。君子的なるべし。世才あり過ぐべからず。はねまはることが好きにては不可也。世俗的にて物質的慾望に追はる〳〵人にては不可也。思考することが、何よりも好きなる人ならざるべからず、沈着なるべし、がさ〳〵すべからず。學者は、思考するが主なる事業なれども、餘り感情がなさすぎては、到底大學者となる能はざるべし。

職務の高下

高き地位にありとも、低き地位にありとも、職務は職務也。人は職務に忠實ならざるべからず。

人は誰も自惚ありて、その慾望は限なきもの也。從つて地位を得ざる者、不平多し。往々こぼして曰く、我を用ゐる者、明なし。我才を知らずして、我をして才を用ゐるに由なからしむ。馬鹿々々しと。更に一歩進みて、我より上にある人をのゝしりて、彼れ無能なり。然るに好き地位にあるは何事ぞと。不平こうじて自暴となり、月給だけの仕事すればよしとて、その職に忠實ならざるもの少なからず。不心得も亦甚しといふべし。

秩序ある世の中、兵卒如何にすぐれたるも、一躍して大將とはなれず。兵卒たる間は、兵卒として、あらむ限りの力をつくすの外なく。これ即ち大將に進むの途也職務に滿足せざるは、その人に取りても、不幸也。いかなる人にありても、氣持よからず。この職に忠實ならざることが因となりて、終に高き職をうるに由なかるべし。忠實に草履をも取る人にして、よく天下をも取ることを得べき也。

年賀

正月のはじめの三日間は、一年中の大安息日也。昨日の鬼も禮に來る時也。一年中の仕事もすまし、借金もすまし、春着もこしらへ終りて、心も、體も、全くのどかなる時也。一年中の命の洗濯は、この時にすべき也。

たゞひとつ、面倒くさきことあり。即ち遠き處の知人へは、年賀狀を出さゞるべからず、近き處の知人へは年賀に廻らざるべからず。これ面倒くさきことは、くさけれど、浮世の義理也。虛禮と云へば、虛禮なれど、世の中には、虛禮も必要也。

人は、誰も職業にひそがしきものなれば、平生、用のなき時は、無沙汰がちにな

るものにて、死んだやら生きて居るやら、何處へ轉居したやら、わからなくなつて仕舞ふこと多かるべし。また、同じ都に居る親しき人にても、相互に、職務におはれて、用のなきに、閑談しにゆくいとまなく、いとまあるも、さまで氣の合はぬ人ならば、相互に往來するを遠慮するやうになりて、疎遠になり勝ちになるべし。年賀の往來は、舊交を溫めて、社交上、必要なる事也。

如何に安息日なればとて、家にごろ〳〵と寢轉んでのみ居るは、よろしからず。いづれ浮世也、樂な事ばかり望むことはあやまれり。面倒くさくとも、年賀狀は、かくべし。親しき家へは、年賀にゆくべし。自から書かずともよし。活版にても可也。代筆にても可也。又自から年賀にゆかずとも可也、代人に名刺を賴みてもたしてやりても可也、數人言ひあはせて、便宜々々に、四五人の名刺を一つにして、もちゆきても可也、即ち、あらむ限りの虛禮をつくして可也。物事によりては、虛禮は不可なれども、年賀といふことが、既に虛禮也、年賀には、虛禮にて十分也。虛禮の實禮に如かざるは言ふまでもなけれど、なほ無禮にはまされり。虛禮にても、舊交を溫むるを得れば、社交上、益こそあれ、毫も害なき也。

衞生我觀

のん氣になりて、心中毫も屈托なきやうにすべし。餘り衞生の事を氣にして、くよ〳〵思ふべからず。不消化物も食ひて、胃をならすべし。時に、暴飲も暴食もすべし。その代り、運動を怠るべからず。少しく運動すれば、少し暴飲暴食して可也大に運動すれば、大に暴飲暴食して可也。往來の不便を忍んで、空氣よく、人のこみあはぬ處に住まふべし。如何に多忙なるもよし、元氣常に旺盛なるを要す。

余の衞生觀は、此の如きに過ぎず。もとより素人考に過ぎざれども。かくすれば、無病息災なるべしと信ず。安りに人に强ひむとするにはあらず。

食物の戒

中等社會以下家事を司る女にありては、勿躰なしの語を用ゐること多し。而かも、眞に之を用ゐるにあらずして濫用す。勞働して歸りたる亭主が、流しの水をくんでくるを勿躰なしと思はゞ、これ眞の勿躰なきなり。されど、かゝることは、當然と心得て、勿躰なしとも難有しとも思はず。明朝まで置かばくさるべき食物でもあれば、こゝにはじめて勿躰なしの語を發する也。腹はり居れど、無理に之を平げつくす。食物の徒にくさることが勿躰なくして、身體を害することは、さつぱり勿躰なくなしと見ゆ。既にくさりて、舌をさすものあるも、なほ曰く、勿躰なし、勿躰なしとて、之を食ふ。一錢か二錢かの飯をすつるが勿躰なくして、爲めに病をかもして、之に幾十倍せる藥代を出すことは勿躰なくなしと見ゆ。否、爲めに命を損するも、なほ勿躰なくなしと見ゆ。

勝負事

勝負事を好むは、怯者なりとは、源義家の言なるが、その勝負事とは、賭博に類する遊戯の事なるべし。勝負事に種類多し。その中には、賭博的ならざるも、運に待つことの多きものあり。花合せトランプの如き是也。運によらずして、全くその人の伎倆に由るものあり、碁、將棋、歌がるた、玉突の如きこれ也。競漕、競走、ベースボールの如きは、運動と云へば、運動なるが、勝負事と云へば、勝負事也。而して、碁や、將棋や、歌かるたや、勝負事と云ふものゝ、一種の技術也。その物自身には全く賭博的性質を離れたるもの也。余は、必ずしも、青年の士に、運動以外の勝負事をすゝめず。されど、學課を妨げざる限りは、必ずしも之を拒絶せよとは云はず。

あれ少時、碁、將棋、歌かるたの如き勝負事を好み、角力、競走、棒飛、高飛等

の運動をも好みたり。今、實際を語れば、その爲めに、學課を妨げられたり。勝てば、勝つで、なほ勝つて見たく、敗れば、なほ更止めたくなく、體力のつゞく限り根氣がなくなる限りは、それに熱中して、學課の事が氣にかゝらぬにあらねど、今日は遊びても、明日よりは人一倍の强勉せむと、自分勝手な理屈をつけて、其の日を過し、明日になれば、またその勝手事がやつて見たくなり、かくて底止する所を知らず、古人が、碁の好きなものは、親の死目にあへずと戒めたるは、尤も千萬の事也。運動とても、適宜といふ事は、守り難きものにて、大に疲勞するまでやりたくなり、疲勞のあまり、精神の弱るもあり、精神よわらざるも、腹へりたる爲めに飽食し過して、胃を害し、胃を害せずとも、飽食の結果、眠くなりて、勉强に堪へざるに至るもあり。余は、くれ〳〵も青年の士を戒む、好きなら好きで、勝負をなすもよけれど、決して〳〵他に妨害を及ぼすまで、その度を過すべからず。

殊に勝負事の本色は、わが力を試み、技をみがくにあり。終局の勝負は、必ずしも之を問ふを要せず。然るに、世俗は、唯勝負のみを主として、手段の工夫をと粗にす。これ未だ共に勝負事を談ずるに足らざるもの也。

學校騷動

此頃は、大に減じたるやうなれど、學校騷動は、今に全くその跡を絶たず。まことにに〳〵しき事也。

學校騷動を起すにも、それ〳〵相當の理由あるべし。されど、少年の士、深く事實の眞相を解せず、或は小さき不平に驅られ、或は校長を誤解し、或は野心ある教員におだてられなど、血氣にまかせて、無謀なる擧に出づるが、多くの學校騷動の原因也。年とりて、智惠つきて考へて見れば、其非を知るべきも、その時は、尤も千萬とのみ思ひ込み、青年の活氣押へ難く、學問も、將來の成切も、すべて棒をふるに至る。われ其活氣を愛す。されど、青年の活氣をもらすべき所は多し。賄征伐